
気が付いたら転生してチートなりリカルだった。

めたるみーと。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気が付いたら転生してチートなりリカルだった。

【Nコード】

N5813W

【作者名】

めたるみーと。

【あらすじ】

はい、初投稿。

めたるみーと。と申します。

さて、私の事なんかどうでもいいのでちゃっちゃか注意事項と行きましょう。

注意事項

・この作品はリリカルなのはの二次創作。及び主人公最強厨二病転生ハーレムヘタレご都合主義亀更新。

などというあまりにも酷いことになっております。

以上の事項がお嫌いである。または、作者がマジで社会のゴミ。
という方は今すぐに・・・！？

ブラウザバックしろ！ここは俺が押さえる！だから早くいけえ！！

・と、まあこうして暴走することがあります。

そのへんご了承ください。

prologue

きゅんくゅんかゅんくゅん

チャイムが鳴る。

教室から次々と出ていく小学生達。

窓側の一番後ろの席の両耳にピアスをつけた男の子は、カバンを手にとり、ドアへと歩き出す。

今日のご飯は何にしようかねえ・・・などと考えながら。

ここは海鳴市私立聖祥大附属小学校。

そう、リリカルなのはの世界である。

と、いうわけでこんにちは。幽亜勇と言います。

あんたなんでそんな世界に居るの？

とかつて聞かないでいただきたい。

俺だって知らない・・・気が付いたらこの世界でピアス型のデバイスであるアビスとイモータルが耳に付けられた状態でソファに腰掛けてたんだ。

前世の記憶、そしてデバイス、さらにはチートな身体能力、戸籍、馬鹿でかい魔力。

家、金、何から何まで用意されてた。

恐らく二次創作でよく見かける転生って奴だと思う。

そういえばよく読んでた・・・ハーレムものとか読んで幸せになったフェイトとかを見てほんわかしたまんだ・・・。

で、チートな俺が原作に介入して原作をそげぶしてやんぜやっほう！！

ってんなことできまっせん・・・。

一つ、俺自身ひっじょーに面倒である。

二つ、俺が介入することで他のSSのように原作に歪みが出るのが怖い。

三つ、なるべく平和に暮らしたため。

以上、三つの理由により、俺は原作に介入しないことにした。
まあ、俺が存在するだけで原作が変わる可能性も捨てきれないが・・。

だ、大丈夫さ・・あの子たちみんな強い子だから・・。

と、まあそんな感じで原作には介入したくない俺だったが・・誤算が一つ・・。

「幽亜、塾いくわよ!」

「幽亜君、一緒に行こうよ。」

車で送ってくよ?」

原作無印のメインキャラアリス・バニングスと月村すずかと、通つてる塾が一緒なことだ。

なんだこの運命力は・・・。

『マスターはまるでチョウチンアンコウの頭のアレみたいに何かをを引き寄せますからね。

致し方無いかと。』

『そうだな、アビス。

マスターは基本巻き込まれ型に属するタイプの人間だからな。』

『おまえらマジで黙ってくんね？』

はい、こいつら俺のデバイスです。

先に話したチョウチンアンコウうんぬんかんぬんだったのがアビス。

巻き込まれ型だとか何とか言ってたのがイモータル。

どちらもデバイスとしては優秀らしいが、

いかんせん人をからかったり人間らしい面をのぞかせたりする。

長い時間をかけて熟成したデバイスが人間らしい一面を見せると言うのはSSを読んで知ってるのだが。

そんなに熟成しているのかははなはだ疑問である。

「えー・・・っと・・・バニングスさん、月村さん。

俺はあとからゆつくりいくよ・・・。

ちよつと夕飯の買い物もあるし。」

「そう・・・それじゃ、仕方ないわね。

行きましょ、すずか。」

「うん、じゃあまたあとでね、幽亜君。」

「うん、それじゃあまた。」

と、まあ二回に一回ほどこんな感じで御誘いを拒否っているのだが・・・。

なんだろうね・・・俺なにかあれですかね？

なんかやつちまったのかね？

「いえ、バニングス様、月村様、共に面倒見が良いようでしたので、フラグ的なアレは“まだ”建ってないと思います。」

「いや、アビスよ。

そうとも言いきれんぞ。

一目惚れ。

もしかしたら・・・ということも考えられる。」

「なるほど・・・！」

流石ですイモータル。

伊達に某小説投稿版で小説を書いてるだけありますね。」

「おい、初耳なんだが。」

デバイスがなんで小説書いてるんだよ！？

っていうか何その無駄なスキル！

「この間試したところ、近所の銀行のセキュリティを掻い潜るまで2分程。」

アメリカ政府の核まで五分程でした。』

『二人でやればもっと早かったかもしれないイモータル。』

『いや、何？

ハッキングなんてお前らできたの？

つかやんな。割とガチで。』

『マスター、すみませんが私の個人的な趣味ですので、

そこら辺は黙認していただけると非常に助k『出来るかポケエ！

！』

マジでなんなんお前ら・・・？

おまえらマスターをなんだと思ってるん？

「さーと・・・今日の飯はなんにしようかねえ・・・。」

『お隣の奥さんから肉じゃがのおすそわけと三着目のワンピースも
らってましたよね？

あれおかずにすればいいじゃないですか。』

「いや、ワンピースおかずってどういうこと・・・？」

『いや、男性ならおわk『割るぞイモータル。』い、イエスマスタ
ー。』

現在、近場のスーパーまで移動中である。

晩飯買いに言っただよ。

親もないし・・・何故か周りからは

“不慮の事故で両親を亡くした男の子”という認識らしい。

そして、何故か皆家族がいないのに小3の子が一人で暮らしてるの

か疑問に思わないという……。
なんという御都合主義……。

「うーん……。どうしようかねえ……。
適当にコロッケにでもすつか。」

『いいんじゃないですか？』

あ、ほら、そこにありますよ？』

「お、ほんとだ。」

コロッケを取ろうと手を伸ばす。
すると、横から手が伸びてきた。

「ん？」「」

「ああ、すんまへん。」

お先にどうぞ？」

「え、ええ、これはどう……。も……。？」

そこには未来の夜天の主、八神はやてがいた。

prologue (後書き)

はい、始まってしまいました。

「気が付いたら転生してチートなりリカルだった。」

略して「チーリリ」(?)

微妙にわしゃわしゃ書いていきつつ頑張りますのでぬるま湯のような眼で蔑んで下さい。

それでは。

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になった。（前書き）

はい、亀更新の真髓きました。

それでは、お楽しみいただければ幸いです。

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になってた。

はい、皆様こんにちは。

幽亜勇です。

今、私は八神家のテーブルにて待機中。

え？原作に介入しないんじゃないかなかったのかつて？
いや、とりあえず俺の説明を聞いてくれ。

まずはやてと鉢合わせ。

とりあえず二人分のコロッケをとり、一つを渡す。

自己紹介

とりあえず晩飯買って、はやての車椅子を押して送っていく。

到着した途端「なあ、勇君。ご飯食べてかへん？」

やんわり断る

上目使い「……………だめ……………」

八神家テーブルにて待機中↑今ここ。

うん。

上目使いの恐ろしさ・・・たつぷりと味わった。

アレは卑怯だよ。反則だ。

断れるわけがない。

『マスター、女の子と間違われたを忘れてます。』

『うるせえよ忘れさせるよコノヤロー。』

頼むからさあ・・・。

「あの、八神さん？

何かお手伝いできることありませんかね？」

じーっとしてるのがちよっと居心地悪かったので、
はやてを手伝おうとした。

「ええよええよ。

勇君お客さんやからゆっくりしたらええねん。

せやからちゃんとテーブルに座ってまっててな？」

「でも・・・八神さん車椅子じゃないですか・・・ちよつとでも手伝いますよ。」

「こつみえてもこんなこと毎日やってんねんで？
せやから余裕や余裕。」

いや、それはそうかもしれないけど・・・。

「それにな？」

誰かと一緒に食べる晩御飯なんて久しぶりやから、
うちが上手く作っても他の人からみて美味しく出来てるか分から
へんから、

勇くんには毒見役もとい味見役になつてもらいたいねん。」

「Σお客さんを毒見役だと!？」

「おお・・・ええ突っ込み!

っていつかなんで敬語なん?

せつかく知り合えたんやし、タメ口でいこうや。」

・・・でも・・・。

原作に関わつちまうからあんまり関係持ちたくないんだけど・・・。

“誰かと一緒に食べるご飯なんて久しぶりやから”

・・・そういえば、原作では親もじいちゃんもばあちゃんも死んじ
やって・・・、

天涯孤独だったつけ・・・。

「・・・今の俺と同じだな・・・。」

何故かヤケクソ気味な笑いがでる。

この世に生まれた時から親なんていなかったのに・・・何でだろう?

「ん?なんかいうた?」

「いや、なんでもないよ、はやて。」

「お!敬語抜けたなあ。」

それでいいそれでいい!

よっしゃ！友達に遠慮はいらん！

手つだつてえな勇君！

「はいはい。」

・・・偽善・・・でもいいか。

なんか楽しいし。

それに・・・。。。

「そうええ！？

勇君どんな包丁さばきしとるん！？

何？し、神速！？」

「いや、普通にやってるだけだけど・・・。」 シュガガガガガガガガガガ

僕の初めての友達だ。

「アビス、イモータルはさっきから反応が無いんだが・・・。」

「今、執筆中です。」

「は？」

「最近ブログ始めたみたいで・・・。」

「・・・・・・・・。。。」

気が付いたら夜天の主（予定）の家で晩御飯御馳走になった。（後書き）

はい、遅れました。

週一で投稿できたらいい方だと思って下さい。

チートな性能、一つだけ見せました。

え？何か分からない？

包丁さばきですけど・・・何か？

では、この次も見てくださいとうれしいです。

それでは、See you！

気が付いたらお隣がとんでもなかった（前書き）

まさかの投稿。

なんだ……頭が冴え渡る……！

気が付いたらお隣がとんでもなかった

幽亜勇です。

早速ですが、ヤバいです。

え？何故って？

目の前を見ていただけるとわかると思います。

「は、はじめまして、フェイト・テストロッサです。」

「あたしはアルフ・テストロッサ。

ま、せっかくお隣なんだからよろしくね。」

はい、お隣はテストロッサ家でした。

原作だとマンションじゃなかったか……？

え？マジこれどうなってんの？

あ、あれか？

よくある世界に俺というイレギュラーが混入したことによる改変ってやつか？

『となりに引越してきた美少女……よくあるラブコメテンプレそのままですね。』

いや、こういうのも熱くていいと思いま『黙れイモータル』い、
イエスマスター。』

「さて、ヤバいぞお前ら……。」

『何がですか？』

「なんかトラブルの匂いがする。」

『T o L o v e るの匂い……ですか？』

「イモータル……なんか違う気がするがまあいい。」

テストロッサ家の訪問から数分後。

デバイス共と会議中。

ちなみに軽く飯食らいながらです。

「個人的にあの子はトラブルを呼び込む気がする。」

というわけで挨拶もそこそこにして敬遠しようかと思う。」

『あの金髪の……フェイト様でしたか？』

先程スキャンしたところ魔力がA A A + ランク。

さらに雷の魔力変換資質持ち。

お姉様と思われるアルフ様もA A ランクはありました。』

『凄まじいな……まあマスターには及ばぬが。』

「俺はチートみたいなんだし、それに魔力もちゃんと“鍵”かけ
たはずだから今はD以下だよ。」

『その“鍵”が問題なんですよ……。』

そう、俺の三つある能力の一つ。“キーマスター”ってところか。

この世界風に言えば“希少能力”レアスキル。

魔力で“鍵”を作り出し、ロックしたい場所、モノ、に差し込み、捻る。

それだけで何かを封印できるスキル。

ただし、現在かけられる鍵は三個まで。

俺の魔力はSSS+オーバー。

流石の“キーマスター”でも

魔力は封印しきれなかったみたいで、

封印するために三つても俺のリンカーコアを封印するのに使ってる。

「いや、もう“鍵”使えないし。」

『残りの2つにも問題あるd「キャアアアア!!!」っ!!!隣からですマスター!』

「Σうえ!?マジかよ!」

くそっ!

なんでこんなめんどいことになるかねえ!

気が付いたらお隣がとんでもなかった（後書き）

はい、やりました。

奇跡の投稿です。

さて、主人公のレアスキルについて解説したいと思います。

希少能力

名称 キーマスター

効果 魔力で“鍵”を作り出し、
鍵をかけたい場所、モノを指定。

それに差し込み、捻ること場所なら空間を固定。

モノならその機能を封印する。

主人公のリンカーコアはSSS+オーバーとなっているが、
実際、SSS+オーバーとしかランクがないので、
そうなっているだけである。

本当ならSランクのロストログアくらいなら“鍵”一つで封印できる。

とまあこんな感じの厨設定です。
では、ばいちゃ。

気が付いたらお隣を餌付けしてた（前書き）

はい、餌付けです。

バトル入れるのは結構先になりそうです。

気が付いたらお隣を餌付けしてた

皆さんどうも、幽亜勇です。

今どうなってるとおもいますか？

今僕は……。

「ふ、ふええええ……！」

勇、勇ッ！」

フェイトに泣きながら抱き付かれます。
どうしてこうなった。

く回想（あ、初めての回想だ。）

俺、全力でお隣に疾走中。

先程悲鳴が聞こえたためである。

悲鳴は恐らくさつき挨拶に来たフェイトのものだろう。
あれだったし、水樹奈々ボイスだったし。

ピンポーン

「お隣の幽亜ですけど！何かありましたかっ！？」

反応無し……ならば……。

「入りますよ！（強行突破！）」

バンッ！

ボオオオオオオオオ！！！！

「ふえ、ふえ、フェイトお！はや、はや、はやっく、消して！火！
火い！」

「む、無理無理無理！こ、怖いってばあ！だ、誰か助けてえええ！」

カオス。

その一言に尽きる。

コンロから燃え上がる炎。

慌てふためきまくっている金髪の少女とオレンジ色の髪のお姉さん。
なんだこの空間は。

「あーもう！慌てんなコラ！」

ずうずうしいとは思ったが、とりあえず火とフェイトの間に割り込み、

コンロを消す。

「ふう・・・もう何やってんだコラ！？」

火の扱いには「Y」「ふえええええええん！！！」とってグヴ
オアア！！？」

ってわけではい、冒頭に戻ります。

「ぐすつ・・・ひぐつ・・・。」

「あー・・・落ち着いたか？」

よしよし、と頭をなでる。

アルフは「べ、別にあわててなんかないよつ。」と何故かツンデ
している。

何故。

「まあ、火災にならずに済んでよかったではありませんかマスター。

」
「いや、まったく。」

さらにはお隣の少女との邂逅までばつちりで「何マジで普通に喋
ってんだてめえらはあああああああああ！！！！！！」
「いや、おもしろくなりそうだったの？」
」

なんでいきなり喋りだしてんのこのデバイス共オオオオオオオオツ
！！？

おい、お二人ぽかーん・・・って顔してんじゃねえか！！

「あ・・・あの・・・それデバイス・・・？」

「なんであんたが持つて・・・？」

っ！まさかあなた管理局の魔道士かい！？」

そういつて何故か構えるアルフ。

「は？いや、ちがうよ？

待つて！？ねえ待つて！！

たのむから話きいて！

ちょ、まってまって！痛いのだから！

ちょ、助走つけないで！ふえ、フェイト！なんとかいってkΣル
オボオ！！」

「だから違うつて、管理局とか魔法とかめんどくさくていやだから。あと今ので痛いのがもつと嫌になった。

あー、駄目だわ。

なんかアルフの分のご飯失敗しちゃいそうだわ。もう凄い勢いで焦げそうだわ。

卵焼きじゃなくて可哀想な卵になりそうだわ。」

「さ、さっきからごめんって謝ってるじゃないか……。

機嫌直してくれよ……あとご飯は肉がいい。」

『無駄ですよアルフ。』

『そうそう、マスターはあんがい根に持つから。

ほら、今にも肉がただの炭n「そんなことしないからね!？」』

はい、なんとか和解致しまして、テストロッサ家にてお食事です。発火の原因？

お腹すいた↓ご飯作ろうとしてフェイト頑張った。↓ゴマ油を何故

かコンロに直入。↓火遁の術。↓俺来た。

こんな感じ。

通りでなんか香ばしい匂いがすると思ったわ。

一応ですがフェイトやアルフには管理局の魔道士ではないと信じてもらえました。

それで、何故ご飯作ってるのが俺かというと。

余りにお腹がすいていたらしく、俺がアルフにぶん殴られた後、フェイトから「ぐっつ」と音が。

『ごめん……お腹……空いちゃって……//』

そして棚から取り出しましたるはカロリーメイト。もうね、なめてんのかと。

『なんでカロリーメイト！？』

何？バカなの？死にたいの？』

『え？いや、でもこれも以外と美味しいよ？』

『美味しい以前の問題だこのバカ！』

ゴスッ

チョップを喰らわす。

『ゝ！？？？』

『そんなんじや栄養もままならんし、下手すりゃ太っていくばかりじゃアホ！』

・・・しゃあない！俺が作る！待つとけコラ！』

『え？え？』

とまあこんな感じである。

フェイトは終始困惑していたが。

『めんどくさいと言いつつ面倒見のいいマスターが大好きですよ私は。』

「ハッ、アビス、デバイスに言われても嬉しくねえよ。」

「おら出来たぞ！

運ベアルフ！

特に肉を慎重に！」ポイツ！

「Σうおおい！！」

慎重にって言うてんのにあんたは何故投げる！？」パシッ

うつせ、さっきの仕返した。

『やっぱり根に持つタイプじゃないですか。』

それくらいいいだろが。

「「いただきまーす。」」

「うまつ！うまつ！？」

「うまーい！！」

「ほんとだ・・・美味しい・・・。」

「お、そうかそうか。」

「まだまだあるからガッツリ喰え！」

「そしてでかくなれ！」

ガツガツガツガツ

はむっ、もきゅもきゅもきゅもきゅもきゅ

性格が食べ方に表れているようだ。

「ほら、アルフ、がつつくな。」

「おい、こぼすなっつての！」

「あ、悪い。」

「でもなんでこんなに美味しいものがコイツから・・・。」

「あ、フェイト、米粒付いてるぞ。」

「え？嘘？」

「ほんとほんと、ほらよ。」

フェイトの口の端についでる米粒を取って喰う。

「・・・・・・・・あ・・・・／／／」

『ほうほうほう・・・・流石はマスター・・・・良い感じにフラグを乱立いたしますなあ・・・・。』

イモータルがなにか言ってくるけど無視。

やべえ、やっちまった。

と、とりあえず誤魔化そう。

「ほら、食わないのかフェイト？」

「え？あ、ああ、た、食べます・・・・／／／」

そう言つて食べるのに戻るフェイト。

顔真っ赤・・・・やべえ、もしかやフラグ立てたか・・・・？

だ、大丈夫！これくらいで立つほどやわ（？）じゃないさ！

あれ？

これあれじゃね？

餌付けしてね？

完全に介入してね？

気が付いたらお隣を餌付けしてた（後書き）

気が付けばお気に入りが13件・・・本当にうれしい事です。

コメントして下さったおーたん様、A V E E様。

励みになりました。

これからもこのような作品でよろしければ、主人公共々よろしくお願いたします。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

頑張れてる。

俺頑張れてる。

今回は戦闘らしきものが入りませ。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

じゃんぼ！おーべーか！

自重します、幽亜勇です。

昨日、テストロッサ家の餌付けに不本意ながら成功いたしました。
そして、しばらく考えたんですが……。

もう原作始まってね？

だってフェイト降りてきたし。

そつえばなのはも念話してるわ、魔法についてユーノとお話（O

H A N A S H Iではない）してるわ。

ジュエルシードやらなんやら言ってたわ。

ってことはさ、これもうグータラしてりゃ終わるよね？

よし、なんかやる気出てきた！

今日は全力で寝るぞ！

俺はいつも昼寝するときによく行く神社へと足を向けた。

『ふふふ……さてさて、ほんとに面倒事に巻き込まれないんですかねえ……マスターは。』

『イモータル、急に話し方を変えないでください。』

そう、この時は忘れていた。
そういえば二つ目のジュエルシードって神社だったなあ・・・って
ことを。

SIDE なのは

学校からの帰り道に、ジュエルシードの反応を感知した私とユーノ
君。

山の上の神社で発動したらしいの。

「なのは！レイジングハートを！」
「うん！」

首から下げたレイジングハートを手に持つ。
階段を一気に駆け上がると、そこにいたのは大きな犬みたいなもの。

「原住生物をとりこんでる・・・！」

ユーノ君が険しい顔で言う。

「ど、どうなるの？」

「実態がある分手ごわくなってる！」

「大丈夫！・・・多分。」

何の根拠も無かったけど、でも、そんな気がした。

「なのは！レイジングハートの起動を！」

「へ？起動て何だっけ！？」

「え・・・？」

き、起動って何？

な、なんだっけ？

そうして悩んでる間にもジュエルシードの思念体さんはこっちに向かってきた。

えーっと・・・えーっと・・・！

「我は使命をから始まる起動パスワードを！」

「Σえええ！？

あんなの覚えてないよぉー！」

どどどどど、どうしょー！！

「も、もっかい言うから繰り返して！」

「わ、わかった！」

「グオオオオオオオオアアアアオアアオアアオア！！！！！！！」

そうこうしてる間に思念体さんはこちらに突っ込んできた。
もうだめだと思ったその時だった。

「我、地獄の使者、邪なるの眼まなこを持ちし者。

紅くれないのその眼に映るは我に仇なす者か、我が友か。
仇なすものには銃弾を、友には我が命を。

“アビス” set up

“yes master stand by ready set
up.”

どこからか聞こえたその声。
透き通るような声だった。

その次の瞬間、思念体さんは吹き飛ばされた。

「・・・まったく・・・。」

ふと、後ろを見た。

「めんどくせーことになった・・・完全に忘れてたわ・・・そういや俺って魔力感知できないの？」

『我々はきづいていましたが、マスターがお気づきにならなかったようなので、放置いたしました。』

『その方が面白くなりそうだったからですが。』

「お前らマジでいつか壊す。」

そこに居たのは、額に真っ赤な眼のような物が埋め込まれて、その下の二つの眼を隠すように真っ黒な仮面を付けて。

血みたいに真っ赤な服を着て、肩に大きな箱みたいなものを付け、両手に赤黒い銃を持った私と同じくらいの男の子が立っていました。

「さて・・・お前ら。」

「は、はい!？」

「ぼ、僕たちですか!？」

ユーノ君があわてる。

それはそうかもしれない。

だってあの恰好からして、凄く怖い。

「そ、お前ら。」

あのさ、あいつぶつ飛ばすのは簡単なんだけど、封印が出来ないんだわ。

それ、お前らに頼んでも良い？良いよね？異論とかマジ認めないから。

Do you understand ?」

「あ、は、はい！」

つい答えてしまう。

緊張していたのか、声が上がってしまふ。

それを聞いたその人は、ちよつと笑つて。

そして、思念体さんに向かつて、

「？キーリリース。」

その声と共に感じたのは。

「な、なんて魔力・・・！」

その人から発せられるとっても大きな魔力。

今の私なんか、比べ物にならないほどの、膨大な魔力。

「アビス、ショットソウルミラージュ。」

『All right my master .
shot soul mirage .』

そうつぶやくと、思念体さんの周りに出来るバリアみたいな球体。それはふわりと浮くと、その人の目の前に。

「悪いが・・・俺の昼寝の時間を邪魔した報いってことにしといてくれや・・・。」

シュート。」

そのバリアに向かって放たれる紅黒い弾。

その弾がバリアの中にずぶつと入った。

次の瞬間、バリアの中で弾は乱反射。

思念体さんを一つの弾が何度も何度も攻撃する。

「バースト。」

『B u r s t .』

ズ・・・・・・パン！

バリアが小さくなったと思ったら、破裂。

バーストと言った割りには見た目が地味だった。でもわかる。

その破裂に込められた魔力を。

「おい。」

「Σひゃ、ひゃい！」

「封印頼んだわ。」

「あ、はい！」

「え、えっと……じゃあなのは、パスワードを……。」

パスワードを教えてくださいようとするユーノくん。でも、その人が止めた。

「んなパスワードなんぞいらんだろ。」

お前のデバイスの名前は？」

「え、えっと、レイジングハートです。」

「じゃ、レイジングハートセットアップでいいだろ。」

言え。」

「れ、レイジングハート、セットアップ！」

「stand by ready set up」

途端、光に包まれて、私の手には杖になったレイジングハート。

「パスワードの詠唱を省略した……？」

ユーノくんは驚いてた。

その人は特に驚いた表情も見せず、指でジュエルシードを指した。

「封印。」

「は、はい！」

急いで封印する。

封印は無事に終わって、

その人に振り向く。

お礼を言わないと。

仮にも助けてくれたんだから。

「あ、あの！あ、ありがとうござい……？」

振り向いた先には誰もいなかった。

残ったのはバリアが破裂したときにできた魔力の残照。

なんでかわからないけど、その紅黒い光を見ていると何か心があつたかくなるような気がした。

気が付いたら原作始まってたからのんびりしようと思ったたら神社で魔王に会った

アビス

意味・地獄、深淵

主人公のインテリジェントデバイス。

バリアジャケットは紅い服。

外見を例えるなら戦国無双の雑賀孫一。

デバイスモードは二丁銃。

人格データは女。

普通に勇をからかつてはイモータルを援護したりもする。

戦い方も性格も後方支援。

とまあこんな感じ。

起動パスワードが難産であった

主人公のプロフィール紹介（前書き）

めたるみーと。（以下めたみ）「そっぴやさあ・・・。」

勇「ああ。」

めたみ「お前のプロフィールまだ紹介してない。」

勇「うん。薄々気付いてた。

なんかこいつ忘れてんなーと思ってたわ。」

めたみ「っつーわけで今からやるけど、能力についてはまだいっさい触れぬ。」

勇「ほう、それは何故に？

十文字以内で簡潔に答えよ。」

めたみ「ネタばれるから。」

勇「八文字とな。」

めたみ「いや、もういいから紹介しちゃっよ?。」

主人公のプロフィール紹介

名前 幽亜勇

性格 (自称)めんどくさがり 自分勝手 世話焼き

外見 髪色は黒。

大抵は寝癖が付いてる。

セツトアップ時には自動的にオールバックになる。

家族構成 なし

気が付いたら転生して、いつのまにか耳にデバイスがついてて、家族もいなくて、身体的に廃スペックになってて、チートで、なのはの世界に来てて、原作に介入しないように頑張ってるのに、運命力としかいえないものに引き付けられてる&本人の性分で原作に巻き込まれる。

なのは達とは同級生だが、必死で目立たないように頑張ってる。一軒家に住んでる。ローンは死んだ親が完済してくれたらしいことが判明。

家の隣がが何故かテストロッサ家。 「いつの間にか餌付けが完了していた・・・な、何を言っ t (r y」

前世は高一のオタク。ちょこつとアニメみたり、ゲームしたり、s t s はつべのを見ようと思ったけど成長したなのは達がなんかアレだったので断念した。

ルックスは普通ちょい上。我流で剣練習中。

管理局はあんますきくない。

「だってなんかむかつくじゃん・・・時空管理局・・・プッwwおまwwほんとに管理出来てるんでwwすwwかwwww」

クロノとかアースラ組はきらいじゃないむしろ好きなのでエイミーとクロノの仲は応援してる。

ちなみにいっとくと勉強の点も赤点にならないように五十点くらいで調整し、チートな魔力を放出しないために鍵をかけて魔力を抑え

込んでる。

運動もチートな身体能力見せつけるわけにもいかなえので手抜いてる。

翠屋にはケーキとシュークリームがおいしいので個人的に通ってるが、なのはたちと顔は間違っても合わせないようにしている。

味覚は子供。料理はそれなりに（自称）できる。

家庭科は手を抜かないでもいいのですごく好きな教科らしい。

乙メンとか言わないでください・・・orz

顔立ちが中性っぽいので割とガチで女と間違えられる。

近所のおばはんにマジでワンピースプレゼントされたことがある。

現在三着のワンピースと、五本のニーソックスが、幽亜家のタンスに眠っている。

主人公のプロフィール紹介（後書き）

勇「・・・おい、めた。」

めたみ「何？」

勇「最後、何人の秘密暴露してんだよ・・・。」

めたみ「いや、俺作者だし・・・。」

勇「着てないからね!？」

絶対来てないから!!」

めたみ「そんなこと言ってー」

ホントは着たいく・せ・に」

勇「死ねやああああああああああああつ!!!!」

めたみ「はっはっは!!」

効かないねえ・・・!!

こんな攻撃じゃ、あと一万回は攻撃しないと満足できないよ。」

勇「くっ・・・何故・・・!?!」

めたみ「伊達に“めたる”みーと。は名乗ってないってことさ!」

というわけで、プロフィールなんぞおいてみましたが如何なものでしょうか。

いつのまにかお気に入りが28とかいつて若干引いたと共にとてもうれしかったです。

これからも主人公共々よろしく願います。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された（前書き）

前後編にわけた。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された

皆様こんにちは。前回、魔力感知が出来ない事に気が付いた幽亜勇です。

ええ、特訓いたしました。

念話はできて魔力感知が出来ないじゃ洒落になんねえ・・・と思ったのですが、

あいにく、魔力探知が出来ませんでした。

できて半径4mってことです。

某ハンター漫画の旅団にいる侍の円の間合い位です。

狭いです。

富樫仕事しろ。

「あゝ・・・くそっ・・・どうにかして範囲ひろげられねえかな・・・。」

『念話が出来て魔力感知が出来ない、いやぁ・・・あれじゃないですか？』

ねえイモータル？』

『ああ、恐らくはアレだ。

マスター故に、あまりに強力すぎる力を持ったせいか・・・。

才能のメモリーを使い果たしたか・・・？』

「おい、なんでヒ。力なんだよ。」

富樫仕事しろ。

（最近はお仕事されてます。）

帰り道。

ついでなのでフェイト達にも飯作ってやろうと思い、スーパーで買

い物。

「今日はどうしますか・・・。」

中華でいくか？」

「いいんじゃないでしょうか。」

フェイト様もアルフ様も食べたこと無いでしょうし……。

「じゃ、チンジャオロース……お、ピーマンハケーン。」

うお、牛安い・・・。

あとではやてんちにおすすそわけでもすつか？」

是非しましょう。

はやて様もお喜びになるはずです。

そんなこんなでホントに帰り道。

すっかり夕焼けになって、明日は天気によさそうである。

ふと、横を見ると、真っ黒なリムジンが走っていった。

あ、なんかみたことある……。

ああ、あれだ。アリサとすずかだ。

そういやこないだ塾行つたときに乗つてもらつたわ。

ん？そういえば……なんだっけ……なんかイベントあったよ

うな・・。

SSで読んだ……ような……？

あれ……？なんかとてもじゃないが許せないことだったような……

● ○

次の瞬間、ワゴン車がリムジンの隣に密着。

ワゴン車の窓から、銃口がこんにちは。

ドンッ！パン！キキキィ！

タイヤに着弾。

さらつとドアを開けて「ちよ、はなしなさいよっ!!」「や、やめてください!!なんですk」ばたん!ブ□□□□□□□□□□
 ・・・さらっていった。

「・・・ああ・・・思い出したわ・・・。

これアレだわ、絶対阻止するから。」

『ま、マスター？』

とりあえず魔力でHMD作成。これで眼は隠せる。

・・・ホント、こんな使い方は出来るのによあ・・・なんで魔力感知はできないんかねえ・・・。

「はあ・・・ま、無理やりなんて許せねえ性質たちでさあ・・・。

アビス、認識障害を貼れ。」

『い、イエスマスター！』

「イモータルはあいつらのアジトをつかみ次第警察に連絡。」『もうすでに発見しております。

マイマスター！。

私といたしましても、無理やりは許せませんので・・・。」

「へっ・・・さて・・・じゃ、いこうか・・・。

skill on" gravity master"」（重力操作）」。

俺のレアスキルの一つ。

重力操作。

俺が指定した場所の重力の方向を変えたり、強めたりできるスキル。ただし、出来る範囲は俺の半径二メートル内なため、遠距離には向いてない。

が・・・。。。

「なんてことはねえ・・・ちょっと重力を傾けて・・・ただ走るだけえっ！！！！！」

走りだす。

「イモータルッ！」

ガイドしろぉー!」

『Yes master!』

アリサSIDE

私はずかとふたりでリムジンに乗ってた。

塾の帰りにずかと車で話しながら帰って、いつもと同じ。

「そつえば、今日も幽亜君来なかったね。」

「まったく・・・私たちがせっかく送ってやるうって言うてんのに
毎回毎回やんわり断ってきて・・・。」

私たちと行きたくないっての!？」

「あはは・・・なんか恋する乙女みたいだねアリサちゃん・・・。」

「Σは、はぁ!？」

ななななな、何言いだしてんのよすずか!」

「じよ、冗談だつてば・・・。」

「まったく……最近はなんかなのはまで付き合い悪いし……。」

最近のなのは何か変だ。

ぽーっとしてたかと思えば、急に真っ赤になりだすし。

「なんか悩みでもあるのかな？」

「悩みがあるなら私たちに話してくれてもいいじゃない・・・なの
はの馬鹿。」

本人が聞いたら、「Σにやつ!？」とかいいそうなセリフ。
思わずちよつと笑ってしまった。

「まあ、そのうち話してくれると思うよ？
多分今は事情があつて話せないだけだよ。」

「そうだといいわねえ・・・。
ま、気にしてたつてしようがないわ。

明日当たりすずかの家でお茶会でもしようかしら？」

「あ、いいねえ。」

なのはちゃんと恭也さんも呼ぼうか。

あ、あと幽亜君も呼んだらどうか？」

「あいつが来るとは思えないけど・・・駄目もとで誘ってみましようか？」

あいつは何回も私達と一緒に塾に行くことを断っている。
何故かはわからないがなんとなく避けられてる気がして、少し悲しかったりする。

「なんであいつは私たちを避けるのかしらねえ・・・。」

「うゝん・・・どうなんだろうね！」

なんか事情があるんじゃないかな？」

「あいつも事情抱えてんの・・・？」

はあ・・・相談ぐらいなら受けてやるのに・・・。」

これはなのはにも幽亜にもどちらにも言えることだが。

そう考えてふと、外を見ると、一台のワゴン車が近づいてきた。

「・・・？」

なにかしら・・・？」

「・・・！！？」

アリサちゃん！アレ！」

「！？拳銃！？」

隣のワゴン車の窓から拳銃の銃口が突き出てきた。
下に向かつてるから狙いは……タイヤ？

ズダァン！パァン！

「「キヤアアアアア！！」」

大きな音と共に車体が傾く。

タイヤがパンクしたんだろう。

キキキイ！

リムジンが止まる。

「いたた……。」

「だ、大丈夫？ ずずか……。」

「な、なんとか……。」

「あーさ、鮫島！？ 大丈夫！？ 鮫島！？」

「う……………」

鮫島はどうやら頭をぶつけて気絶しているらしかった。
少しほっとする。

だが、安心したのも束の間。
ドアが開く。

その先には黒ずくめの男達がロープを持って立っていた。

「アリサ・バニングスと月村すすかだな？」

ロープを持った男が聞いてくる。

「だったら何だったのよ！」

「あ、アリサちゃん！」

「おい、乗せろ。」

「ちよ、放しなさいよ！」

「暴れんなガキ！」

「止めて下さい！何なんですkΣふぐうつ！？」

「すずか！？」

あんたらすずかに何すんΣんっ！？」

タオルの様なもので口を塞がれる私とすずか。
ワゴン車が発車した。

私たちは一番後ろに縛られたまま放置された。

気が付いたら夜の一族とツンデレが誘拐された（後書き）

後半へ続く。

（ち。まるこちゃん風に）

気が付いたら前後編に分かれていた。な、何を言っ t r y

続いてアリサSIDE

今、私とすずかはどこかの部屋に監禁されている。
手も口も縛られたままだ。

（多分私達の家から身代金をとるのが目的でしょうけど……。）

隣にいるすずかの方を見る。

その眼が少し怯えているように見えた。

（大丈夫……あれだけの大通りで誘拐なんて大それたことしたんですもの。）

誰も見てないはずがない。

誰かが警察に通報してくれるはず……。

ガチャ

「おーおー、大人しいもんだ。」

誘拐犯の一人が部屋に入ってきた。

相変わらず黒い覆面をかぶっている。

その男は、私とすずかの口のタオルをほどいた。

「ゲホッゲホッ！」

「ハア……ハア……あ、あんた達、何が目的!？」

「何と言われてもな、金としか言えねえなあ。」

ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべる男。

「ま、俺がここに来たのは他でもない。

ちよつとバニングスさんちに脅迫のためのビデオメールでも送ろうと思つてなあ?」

男がパチンと指を鳴らすと、

数人の男達が撮影機材らしきものを抱えて入り込んできた。

「大丈夫大丈夫、ちいといたずらするだけだからよ。」

「な、やめなさい!

離しなさいよ!!」

「あ、アリサちゃん!?」

最悪だ。

こんなやつらに……怖いよ……怖いよお……!

「ひっ……ひぐっ……うええええええ……!?」

「おほっ、こいつ泣いてやがる!」

「お前……相変わらず変態だなあ……眼がやべーぞ?」

『いや、お前らの変態度も群を抜いてるぞ?』

突然聞こえてくる声。

私達と同じくらいの男の子みたいな女の子みたいな声。

「だ、誰だ!？」

どこにいやがる!」

『あゝ……なんか楽しいわゝ……こういうの一回やってみたかったんだよなあ……。』

「だからどこにいるつつつてんだろ!」

「上だよ上。」

犯人が上を見る。

そこに、は人がぶら下がっていた。

いや、人が立っていた(……。)。

逆さまに、人が立っていたのだ。

「Σな、なんだあ!？」

「あはははは、なんかいいねえ!昭和のヒーローものみたいでさあ!」

目に何か機械を着けて、

天井に立つそいつは自分に銃口が向けられているのにも関わらず、へらへらと笑っている。

「うゝん……じゃ、例のあの人のセリフパク……リスペクトしようかな?」スタ

天井から私達と犯人の間に降りてくるそいつ。
背丈は私達より少し高い位だ。

「……幼き少女を己が欲望のままに弄び、
さらには辱めようとした。」

人それを……

“ペドフィリア”と言う。」

何だろう、なんか某天空宙真拳の人が見えた。

「だからなこといいからてめえは誰だって聞いてんだよ!!」

あ、それ言っちゃうと……

「貴様等に名乗る名はないっ!」

完全に某天空宙真拳の人だ……。

「悪いけどよ、無理やりつて許せないんだわ……つつうわけで、大
人しくしてくれば危害は加えない。」

「は……ははははは!」

こいつはお笑いだ!

俺等が今てめえに向けてるもんをわからねーってのか!?

そう、犯人達は銃を向けてるのだ。

それもいくつも。

それでも、

「いやいや、んなもんで俺を殺せると思ってるなら止めたほうがいい。
い。」

死なないまでも骨五、六本は覚悟しろ?」

余裕綽々。
声も震えてない。

「ふざけやがって……。」「ジャキ
「なあ……。この部屋狭いなあ？」
「ハア……？」

突然何だつてんだ？」

「いんや、なんもない。」

さて、早速だが。

何も理解することなく、
何も記憶することなく、

……………“沈め”。」

ズガン！！！！

瞬間、犯人は床に叩きつけられた。

何も見えなかった。

何が起きたのか理解もできなかった。

「あ……かは……っ？」

「あっははは、急に静かになったなあおっさん。」

大丈夫かーって聞いてないか。

そういつて少し笑って、こちらに向かってくる。

「怪我ないか？」

「え、えと、大丈夫……。」「

「ん、そっちは？」

すずかSIDE

「ん、そっちは？」

私達を助けた人。

今まで気が付かなかったけど、片手にレジ袋を下げているのがわかった。

「……………」

「ん？どした？」

目を覆い隠すように装着されたHMD。

「おーい見えてますか？」

黒い髪。

「ダメだこりゃ。

……………」パン！！

「Σひゃあああっ！！」

「よし、猫だまし成功！」

びつくりした。

この人を見るのに夢中で気が付かなかった。

「はい、お二人さん、御生還おめでとさん。

一応警察は呼んだけど、僕のこと色々言われちゃ困る訳なんだが……………」

言わないでくれるかにゃ？」

ぶんぶん。

首を縦に振る。

「うわ、凄い勢い。」

「じゃ、お願いしますわ〜。」

「……あ。」

私は彼を観察しているとあることに気が付いた。

「ち、血が……出てますよ?」

「え? あ、ほんとだ。」

右手の袖から血がポタポタと流れ出していたのだ。

「も、もしかして撃たれたの!?」

アリサちゃんも気付いたらしく、うろたえている。

「ん〜……違うんだなあ……ちょっと力使っちゃったからさ。」

「まだ軽い方だし別に構わん。」

「軽い方って……。」

軽い方には見えない。

血がだらだら出て来ているのだから。

「あ、警察も来たみたいだし、そろそろ行くわ。こいつらは外に全員持っていくからあと君らがやる仕事は、警察への言い訳を考えること。」

「OK?」

「は、はい。」

「うっし! ……んじゃ、また縁が有ったら。」

そう言っと、彼は六人いた犯人を片手に三人ずつ持って引きずって行った。
ボタン。

アリサちゃんも私も、
彼が去って行ったドアを見て、しばらくポーツとしていた。

「アリサちゃん……。」

「何……すずか……？」

「名前……聞きそびれちゃったね。」

「……あ。」

「また……会えるかなあ……？」

「……どうかしらね……縁があればって言ってたし……縁があれば会えるんじゃないかしら？」

「……うん。」

気が付いたら前後編に分かれていた。な、何を言っ t (r y (後書き)

はい、お楽しみいただけましたでしょうか。

なんと10000アクセス突破です。

どういうことだ w w

お気に入りも40いった w w

こ、怖いよう w w

お気に入りして下さった方々、

これを読んで下さった方々に、精一杯の感謝を。

ありがとうございます。

ロム兄さんは思い付いたから即実行しました。

ごめんなさい。

気が付いたら何故か月村家に拉致された（前書き）

17000アクセスありがとうございます。
お気に入り55件、本当に嬉しい限りです。
楽しんでいただければ幸いです。

気が付いたら何故か月村家に拉致された

Здравствуй 幽亜勇です。

え？何語？ロシア語・・・らしいよ？

さて、皆様、私は今・・・月村家にいます。

は？サッカーイベどしたって？

無視だ！

「あんた・・・異常に猫に好かれまくりじゃない・・・。」

「あはは・・・うちの猫たちが一斉に・・・。」

「にやははは・・・（こ、こんな光景は生まれて初めてなの・・・。）」

「きゅ・・・。（い、一歩間違えれば僕もあんな風になってたってことか・・・。）」

「み、見てないで助けて下さいよお願いですからあっ!!」

・・・猫に蹂躪されております。

「はあ・・・はあ・・・Σってまだ寄ってくるんかいっ!？」

「あっははははは・・・あ、あんたなんか猫に好かれる呪いでも受けたの？」

ぷっ・・・あはははははは!!」

「わ、笑い事じゃないってーっ!!」

う、うおおおおおおお!!!!!

逃げ切ったるわああああああ!!!!!」

[illegible]

走れ！走れ俺！

どうしてこうなった！

あ、
そうだ！

すずか&アリサに拉致られた

途中でなのは&恭也のつけた。

自己紹介した。

「幽亜勇といいます。」

「一応同じクラスですが知りませんよね？」

「ううん、アリサちゃんとかずちゃんに色々聞いてるの。」

「高町恭也だ……。」

この間恭也さんに睨まれまくり。こんな感じ

屋敷到着。

つづいて、メイドさんのファリンさんが紅茶持ってきた瞬間猫襲来。

猫と鬼ごっこと言う名の闘争開始。
↑いまここ

あ、今の闘争と逃走をかけたんだ。

うまくな？

早く逃げないと追いつかれますよ

「『おまえらは現実逃避もさせてくれねーのかあああああああああ
ああ！！！！』」

不幸だああああああああああ！！！！！！」

某そげぶの人の口癖がつい出た。

「はぁ・・・はぁ・・・に、逃げ切ったか・・・？」

『反応無し。』

逃げ切ったようです。

おめでとうございますマスター。』

『マスター、ああいうのは擬人化を妄想すると受け入れられるらしいd』ほほう、そこまでして割られたいようだなイモータル。』 N
O s i r ! ! 』

なんとか逃げ切ったみたいだ。

さて・・・

「ここはどこだぁ・・・？」

迷った。

だって無駄に広いんだもの・・・。

「っていうかさぁ・・・これ来るよな？

運命力ガッツリ感じるんだけど・・・。」

『ま、それがマスターですからね。』

あ、ジュエルシードの反応をキャッチしました。

それに伴い、フェイト・テストロッサ。及び、ユーノ・スクライ
ア、高町なのは。

動きました。

如何なされますか？マスター。』

「もちろんスルーだ！」『残念ですがマスター。
そうはい神裂。』

「キーリリース！」

「は？」

「ちょ、おま！？

「いつの間に俺のキーのリミッター握ってやがった！？」

「やってみたらできました。」

「Σすげえなてめえ！！

「ってかどうするんだよう！

「これ完全に魔力感知されたる！

「ああ！もう！！

「このアホデバイス！」

「って、おい！？

「あれあの猫だよな！

「で、でか……。」

「生でみるとやっぱり違うもんだなあ……」。

「ってんなことしてるばあいじゃねえ！」

「フェイト・テストロッサ、高町なのは、両名共に到着。」

「フェイト・テストロッサ、猫に対し、攻撃を開始しました。
如何致しましょうマスター。」

「あゝっ！もう！

「少しは考えさせろよ！

「フェイトside

「目の前の白い魔導士の女の子が余所見をした。
わたしが撃った猫が呻いたのを心配したんだろう。」

でも……その優しさが命取り。
バルディッシュに魔力を込める。

「……………ごめんね。」
『fire』

魔導士に向かって雷の魔力弾が走る。

「……………我、不死者、邪なる眼持ちし者。

漆黒のその眼が捉えるは我を貶めんとする者が、
己が盟友か。

貶めんとする者あらばその者には斬撃を。
盟友には我が拳と剣を。

“イモータル” set up
『yes master stand by ready set
up』

ズガアアアアン!!!!!!!!!!

「……………バルディッシュ……………行k「オイコラ」!？」

魔力の塊。

今の私でも……母さんも勝てるかどうか分からない位の魔力の量。

「……………新手の魔導士……………？」

私が撃った白い魔導士を庇うように、誰かがそこにいた。
私と同じくらいの背丈。

額に黒い眼のようなものが埋め込まれ、
紅いサングラスをかけて、黒い鎧のようなものを纏っている。

腰には剣のようなものが付いていた。

「あのさあ……とりあえず言っけどさ。」

「え、は、はい。」

「ジュエルシードもう貰っていい？」

「!？」

驚いた。

何故か私には分かった。

目の前にいる彼は私の味方は勿論。

庇ったはずの白い魔導士の子の味方でもない。

「あ、勘違いすんな？」

「ここでお前らと戦うなんてしねーから。」

「だから構えるのを止めれ、フェレット。」

「でも、それは危険なものなんだ！」

「そう簡単に渡すわけには……!!」

「うつせーぞユーノ・スクライア。」

「!？」

この人から敵意を感じない。

敵ではない。

でも味方でもない。

「はあ……ま、いいや。」

一つ溜め息をつく、猫のほっぺに手をかざした。

「ジュエルシード、シリアル??……封印。」

『yes master』

猫からジュエルシードが出てくる。
ジュエルシードを失った猫は、小さくなると、どこかに行ってしまった。

「……貴方は……封印出来ないハズでは？」

「人の言葉を信じるのは勝手だが、信じることで、利用されることもある。」

つまりはそういうことだ。」

彼の手のひらから額の眼にジュエルシードは収納された。

彼は強い。

有り得ない位に。

でも……。

「すみませんが……私も引く訳にはいきません。」

「この間助けていただいたいてなんですけど……ジュエルシードはユーノ君の大切なものの……だから渡すわけにはいかない！」

私はバルディッシュを構える。

向こうの白い魔導士の子もデバイスを構えた。

「……………はあ……………」

『これも運命ですマスター。』

『そう、運命力です。』

はあ……………。と、もう一つ溜め息をつく。

彼は拳を構えた。

「……………かかってこいよ……………お前らが俺に勝てたら、こんな石く

れてやるよ。」

額の眼が蠢き、こちらを睨む。
黒い眼。

全てを見透かすかのような眼。

おそらく私やこの白い魔導士の子でも、彼にはかなわないだろう。
しかし……。

「……バルディッシュ！」

『ScytheForm』

今、私はどの位強いのか知りたい！

「とりあえず……ここは三人掛かりでいくの！」

『ShootingMode』

「分かった！」

白い魔導士の子とフレットも構えた。

「……行くぞ。」

「ハアアアッー！」

バルディッシュを構えたまま、突撃する。

「よつと。」「ヒョイ

「くっ……！」

精一杯速く動いても、やはり、かわされる。
白い魔導士の子がデバースに魔力を込める。

「デイバイイイイイン……バスタアアアアア！！」

「“月喰”」

『eat barrier』

バシュウウウ……。

「もー！さつきからその盾反則なの！」

「んな危ない魔法ぶつ放してくるからだ……『Move』ろっ！」
ズガン！

「キャアアアアアア！！」

そう、あの“月喰”という盾。

私達が放つ砲撃をことごとく吸収してくるのだ。

私の鎌も当たらないし……どうしたら……？

「考える暇があつたら相手の動きをよく見るフェイト・テストロツ
サアツ！！」

「！？」

『protection』

「“拳墮”アツ！！」

ズガアン！！

「……………かはっ……………！」

プロテクションを破ってバリアジャケットの上からで尚この威力……。
……。

ただのパンチじゃない……？

「いつけえ!!」

『Divine Shooter』

彼が私に集中してる間に、

白い魔導士の子が誘導弾を展開する。

「バインドッ!!」

「……。」

フェレットのバインドが彼を捕らえる。

しかしながら、その表情は落ちていていた。

「シューーーート!!」ガガガガガ!!!!

白い魔導士の子の誘導弾が決まった。

「まだまだ…………!!」

彼がこれでやられる訳がない。

追い討ちをかけるべく、魔力を込める。

「サンダアアアア……」

「デイベイイイイ……」

「レイジッ!!!!!!」

「バスタアアアア!!!!」

ズギヤアアアアアン!!!!

私の雷と魔導士の子の砲撃が轟音と共に彼に炸裂する。

「……やった……かな？」

「わからない……でもまだ用心して……えーっと……」

「あ、私なのは。」

高町なのは。」

「僕はユーノ。」

ユーノ・スクライアだ。」

「フェイト・テストロッサ。」

よろしく。」

「自己紹介は終わったか？」

「「「！？」」」」

煙が一瞬にして吹き飛び、彼が現れる。

彼は一步もそこを動いてなかった。

腕を組んで、相変わらず額の眼がこちらを睨んでいた。

『マスター、いい言葉をお教え致しましょう。』

「ほう、なんだイモータル。」

『“ご都合主義”です。』

「今の状況は違うな。」

何故なら俺が意図的に自己紹介が終わるのを待っていたのだから。」

『oh……そうでした……。』

うんうん、仲良きことは良きことかな。

と一人頷きながらデバイスと漫談のようなこともしている。

「さて……せつかくのバトルなんだ……。」

「……来るよ、なのは、ユーノ。」

「ふえ？あ、うん！」

私達はデバイスを構え直す。

「少しは楽しまねーとな……いくぞお前ら……しっかりガードしろ？」

そう言うとは、右手を前に突き出すと、小さな魔力弾を3つ作り出した。

『lock on』

「どん。」

魔力弾が私達に迫る。

余り速くもなく、込められている魔力も少ない。

余りに拍子抜けだが、私のバリアジャケットは薄いのでガードはしなけければならないだろう。

「バルディツシュ。」

『protection』

私の前に円形の盾を張る。

これでも薄いが、あの魔力弾ならこれでも大丈夫。盾に着弾した瞬間。

シュルルルル！

「え！？」「」

私達の身体はバインドに縛られた。

「さっきユーノに言わなかったか？

素直にガードしろって信じて……。

弾速が遅いからって油断してちゃ駄目だぜ？

例えば、俺の“絡弾”（からめだま）みたいに、

着弾した瞬間にバインドが発動して、

そうやって動きを止められ……。」「

キン！

「「「！？」」「」」

「そうやって魔力を喰われたり。」「

バリアジャケットが強制的に解除された。

飛行機能も解除されたらしく、落ちていく私達。

「レ、レイジングハート！」

『すみません、マスター。』

魔力がギリギリ足りません。』

「そんなっ！？」

「バルディッシュ！」

『右に同じですマスター。』

「くっ……。！」

もうダメ……。！

そう思い、目をつぶった。

……あれ？

「慌てるねえ……」

「可愛いもんだ。」

耳元から彼の声が聞こえる。

目を開けると、目の前に彼の顔があった。

一瞬ドキッとしてしまった。

「あ、あの……お目々さん……下ろしてなの……／＼／」

「あ、わり……って誰がお目々じゃー！」

「あの……僕も下ろして……／＼／」

彼はなのはを背負い、

男……の子？（いたっけ？）と私を片腕ずつ抱きかかえていた。

バリアジャケットは消え、魔力もほとんど吸収され、ほぼ残っていない。

「……完敗です。」

「三人掛かりでも無理だったの……」

「ってあれ、僕いつの間にか元の姿に……？」

「魔力だけじゃなく魔法まで喰っちゃまうからなあれ。変化とかも解けるぞユーノ。」

彼はバリアジャケットを解かずに目の前に仁王立ちしている。
ってユーノ？

「Σええええええ！！！！？」

ユーノくん、人間だったの！？」

「あれ、なのはにはこの姿見せてなかったわけ？」

「初見なの！」

ユーノって人間だったんだ……。

「さて、じゃ、ジュエルシールドはいただくが……異存ないな？」

「……はい。」

負けたのは事実。

彼も勝てたらジュエルシールドを渡すと言っていたし。

「負けは負けだから……。」

なのはも同じ意見のようだ。

「待って下さい！」

ただ、ユーノは何かしら文句があるらしい。

「はい、ユーノ君。

意見があるなら手を上げた後で、

語頭に“来いよベネット”語尾に“銃なんて捨ててかかってこい！”と言いつつ述べるがよい。」

「Σなにそれ！？」

「いや、ノリ。」

閑話休題。(↑一回使ってみたかったB y作者)

side out

「ジュエルシードは凄く危険なものなんです。

人の願いに反応して暴走してしまう。

やっぱり僕達に引き渡してくれませんか？」

ユーノの言い分も最もだな。
しかしだ。

「お前ら……負けたんだろ？」

「……うっ……！」

「敗者は敗北感と悔しさを味わって、勝者に嫉妬してりゃいいんだよ。」

「そ、そんな言い方は「んで、だ。」……？」

「もう一度奪いに来い。」

もっかい鍛え直して、俺に勝てるようになったら……もう一度……な。

そんなときまで、これも、お前らのも預かっておく。」

何かしら罪悪感感じたので、とりあえず言っておく。

多分、これでこいつらは鍛えてくるだろう。

ま、俺も全力は出さないが、本気ではやる。

それに勝てるようになれば、

恐らく原作より強くなっちまうだろうが、

それもいいだろう。

「………わかりました。」

「次は……勝ちます。」

「頑張るの！」

うんうん。

良きかな良きかな。

あ、あれ？

俺自分で魔王、死神、狼、淫獣、執務官とのリンチフラグ立てた？

その後、テストロッサ家にて。

「あのね、勇。」

今日初めて勇以外に友達ができたんだよ！」

「ほうほう、フェイトも大きくなったのだな……おじさんは嬉しいぞフェイト。」

「あんたのどこがおじさんだいどこが。」

でも良かったねえ、フェイト。

「プレシアもアリシアも喜ぶよ。」

「うん、いつかお家に招待できるといいなあ……。」

「なん……だと……?」

「プレシアは原作通りではなさそうです。」

気が付いたら何故か月村家に拉致された（後書き）

イモータル

意味：不死者

バリアジャケットは黒い鎧。

外見イメージは鬼武者、明智佐馬乃助。

今回使用しなかったが、

腰には一振りの刀が刺さっている。

基本的には、魔力を吸収する技を使う。

攻撃手段は殴るか蹴るか斬るか小さな魔力弾を撃って縛るか。

当初は主人公に忠実なデバイスだったが、

作者の独断と偏見で魔改造したら、

2ちゃんねるやVIPでそこそ有名なSS作家になった。

ブログもやっており、

様々なジャンルにチャレンジする、ある意味で高性能デバイス。

アビスと同じくらいの性能ではあるが、

アビスよりもハッキング技術に優れ、

こないだ旅行がてらスイスの銀行のシステムに2日間滞在したらしい。

いっぱいお金あった。

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた（前書き）

寝てないです。

眠いです。

しかし頑張ります。

まったく・・・つべでアニメ見て設定合わせ頑張るしかねえ！

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた

カポーン

「ふいふ……。」

「きゅ……。」

只今、ユーノと絶賛入浴中です。

朝、俺がデュエルマスターズ（何故かこの世界にはあった。）のデッキを調整していたら、突然チャイムが鳴った。

「はいはい、今開けますよ。」

ガチャ

「勇くん、おはようなの。」

満面の笑みで、魔王様がそこにいた。

「は、はあ……おはようございます……？」

えーっと……今日はどういったご用件で……？」

早く無敵城シルヴァーグローリーとリーサで無双したい……。

あ、でも相手がダークルピアのドラゴンデッキだったら死ぬしかねえや。

でも相手のデッキの回りが悪ければいけるか？

「一緒に温泉行くよ！」

「拒否権無しですかそうですか。」

「え？でもアリサちゃんはどうせアイツは休みの日用事ないからって……。」

アリサエ……………。

確かに用事無いけど！

暇すぎてデッキ調整してたけど！

新しく遊戯王（これも何故があった。）も始めようかなと思ったけども！

植物デッキの新風を起こそうとしてたけども！

「失礼ですが、今回は断らs「ほう、なのはの誘いを断ると？」恭也さん……。」

彼女持ちのシスコン御門流の剣士。

でもシスコンは二次創作の中だけじゃなかったか？

「まあ、行こうじゃないか。

聞いたとこ一人なんだろう？

男同士裸の付き合いなんてどうだ？」

恭也さんぐいぐいきます。

何？何が目的なん？

ま、まさか……高町流 O H A N A S H I を……。
いや、むしろここで断れば O H A N A S H I が来るのでは…
…。

「な、いくよな？」

「勇くん、いこ？」

「……………はい……………」

人生諦めが重要。

今日の重要語句なこれ。

『諦めて原作に絡めばいいのに……………』

イモータルはとりあえず自重しようぜ？

と、いうわけで。

「ユーノ……きんもちいいなあ……………」
「きゅ……………」

ユーノと勇。

これはもうユーユーコンビ結成しかない！
と、いうことで温泉にコンビの仲を深めるために入浴中であります。

「よし、ユーノ。」

おじさんが背中をながしちやろう。」

「きゅ？」

「遠慮すんな遠慮すんな。」

ほれほれ、ごしごしと。」

「きゅ、きゅうつん・・・／＼／」

「お、気持ちいいか？」

よっしゃ、もつとやっтар。」

くそう・・・動物状態だめっさかわええ・・・。

いや、アニメで見てた時は凄かったけど。

立派な男の娘っぽかったけど。

「ユーノと仲良いな勇。」

「ま、ユーユーコンビですんでね。」

恭也さんは・・・家族風呂で月村さんのおねえさんとイチャイチャしたりしないんですか？」

「Σブハッ！？

しょ、小学生が知ることじゃない！！」

「そんなこといつて・・・《もう、照れ屋さん》」

「や、やめろ！」

忍の声真似はやめろ！

っていつかなんでそんな似てるんだ！」

「《はっはっは・・・よかったのか？

ホイホイついて来て・・・。》」

「Σお前の声帯どうなってるんだあああああ！！！！？」

うん。

怖い人かと思いきや、意外と面白い人だ。

ちなみに、声真似は俺の前世からの得意技だったのをこないだ思い出した。

出そうと思えば結構出るもんだ。

ちなみに、某やらないか漫画はあった。

そして某動画投稿サイトも存在していた。

遊戯王もシンクロ・エクシーズあったし・・・。

何これ。なんで色々時間ごっちゃになつてんの？
ま、いいけど。

「ま、いつも一人なんで・・・こういうのもたまにはいいですね。」

「ははは、そうかそうか。」

「いや、それならさそつたかいがあつたよ。」

士郎さんが頭を洗いながら話しかけてくる。

ちなみに俺の右隣に士郎さん。

左隣に恭也さんという感じである。

「あ、そうだ。」

士郎さんも桃子さんといちゃねとするんですか？

「Σﾌﾌオオオ！！？」

ね、“ねと”ってなんだ“ねと”って！？」

「《いやあねえ、あなた♪

決まってるじゃないの。》

恭也さんより大人ですから大人のいちゃいちゃでしょ？

つまり“ねつとり”するんじゃないですか。」

「や、やめてくれ！」

桃子の声から、そんな純粹な眼でみないでくれ！

っていつかどこでそんなこと知った!？」

「《禁則事項です》」

「Σだから声帯どうなってるんだ!？」

うむ。

親子で面白いとは・・・ネタに困らん。

「ふいっ・・・ユーノ。

フルーツ牛乳飲むか？」

「きゅっ！」

ユーノが駆け寄ってきたので、とりあえず器に入れる。

「うまいか？」

「きゅー。」

「うんうん。」

そうかそうか。」

ほんとこいつかわいいな・・・。

動物になるとその本能故に動物に近くなるってことか？

「あんた・・・ユーノの言葉わかるの？

すっごい親しそうに話してたけど。

っていうかあんたいつまで敬語なの？」

「・・・バニングスさん、動物の声は聞くものではありません。」

もしくはすぐく大胆な行動をして見せた。
等という普段とは違うことをギャップという。

マスターは、普段は敬語を使い、さらに容姿は男の娘。

そのマスターが敬語ではなく、タメ口で、しかも呼び捨てにした行為が、

何故かこの御三方のツボにクリーンヒットしたのだと私は推測する。」

『お前、馬鹿なの？』

もうイモータルはほっとこう。

それが一番だ。

つてかさつきもイモータルでちょっとしたオチになってなかった？

夜、夜である。
つまり……。

『マスター、ジュエルシードの反応をキャッチしました。』

『………寝たい……。』

『そうはいきませんよマスター。』

？キーリリース。』

『ですよね〜（泣）』

じゃ、行きますか……ジュエルシード奪いに……。

「アビス、setup」
「All right master setup」

「お眼々さん!?!」

「お眼々さんじゃ・・・ないんだけど・・・。」

到着いたしました。

いやぁ・・・流石にアルフがいるやん?

匂いではれたらやばいやん?

匂い消すためにフアブリました。

「あんたが・・・ジュエルシードを奪っていく奴かい?」

「ま、そんなとこだよおねーさん。」

とりあえず、いつまでもお眼々さんじゃアレだし。

名乗ろうかな?

フェイク
僕は贋作。

と、自己紹介もおわったところで・・・頂いていきますが・・・

抵抗するかい?

「勿論!?!」

「だろうと思った!」

「デイバイイイイイイン・・・!」

「サンダアアアアアア・・・!」

「ブラッディ・・・!」

「バスタアアアアアアアッ!?!?!」

「スマツシヤアアアアアツ!!」
「ドレインツ!!!」

アビスから放たれた小さな八つの珠。
その珠はとても小さく、とてもじゃないがこいつではあの砲撃は破壊できない。

そう、“破壊”できないが・・・。

ズチュ!!!!

「「「え!?!」」」

驚くのも無理はないだろう。

俺の“ブラッディドレイン”は文字通り“吸収”する技。
その珠に触れた魔力を“喰い”肥大化していく魔法。

「あ、その珠に触れない方がいいよ?」

そう言つて、俺は彼女たちの砲撃を全て吸収した珠に一発魔力弾をぶち込んだ。

ドゴオオオオオオオン!!!!!!

「こんなふうに爆発するから。」

で、この状態を僕は“ブラッディバルーン”って呼んでる。
それからそれから・・・。」

そう、この珠はトラップ系。
相手の砲撃を喰い、そして爆発する。
が、

「操作も出来ちゃったりするんだなコレが。」
「！？みんな僕の後ろに！」

一斉に向かっていくブラッディバルーン。
お、ユーノ、止める気だな？
漢だねえ・・・よっしゃ、乗ってやるか！

ズドドドドオオオオオオオオオオオン！！！！！！

煙が晴れた。

そこにはいまだ健在のユーノの盾と後ろにいるのはとフェイト。
・・・アルフは・・・？

『マスター、後ろです。』

「らあああああつ！！！！！」

殴りかかってくるアルフ。
でもなあ・・・。

しゅるるるるるるる！！！！！！

「Σくっ！？」

「後ろは死角。」

煙に乗じて後ろに転移して殴りかかってくる可能性を、
考えなかったと思った？」

設置していたバインドがアルフを縛る。

「アルフ！？

すぐにほどこいて逃げて！」

「残念ながら少しばかり時間がかかるかな・・・。

このバインドは捕獲したものの魔力を強制的に放出させる技。いつもより大きくなった魔力に慣れるには、少しばかり時間がいえると思うよ?」

「くっ・・・な、なんで・・・ただほどこうとしてるだけなのになんでこんなに魔力が・・・。

制御が上手いかな・・・ぐっ・・・!」

アルフが苦しそうにうめき声をあげる。

こりゃ、魔力が放出されすぎてバインドが魔力を吸収したか? 若干強くなってるな・・・。

「バスタアアアアアアアア!!!」

「おおっとお!!」

ドオオオオオン!!

「・・・不意打ちとは卑怯なり!」

「Σにや!?

だってフェイクさんもやってたじゃない!」

「あ、そうだった。」

「Σ忘れてたの!?

ま、いいか。

「おらあああああつ!!!!」

「!?!」

ドゴン!!

「ぐっ・・・！」

いつのまに抜けだしてやがった・・・！
「まだまだあっ！！」

いつのまにかバインドから抜けだしていたアルフが向かってくる。
ちっ・・・そうか・・・なのはディバインバスターはバインドを
解くのが狙いか・・・。

「ならば・・・重くなれっ！！」

「Σぐっ！？（急に体が重く・・・！？）」

レアスキル重力操作。

実はコレ、自分にも少し被害が来る。

地球の自転を少しばかり変えるため、いくら俺がチートでも傷が付く。

まあ、傷で済むのに感謝すべきだと割り切ってはいるが。

「“拳墮”ッ！！」ズガァン！！

「キヤアアアア！！！！」

動けなくなったアルフをとりあえずぶん殴って落とす。
さて、あと3・・・。

「バインドッ！！」

「！？・・・しまった・・・！！」

ユーノがバインドを仕掛けてくる。

流石にユーノ・・・補助系が得意なだけあってかなり強固だ。

「ディバインバスター・・・！！」

「アルカス・クルタス・エイギアス！
疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかれ！
バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・！」

ちっ！来るか！

「だったらコイツだア！！
アビス！！」

『All right master" laser launch
her mode" open』

肩のランチャーを起動させる。

こいつは俺の魔力を収束して、一発一発をその威力のまま拡散砲として撃ってくれるサポートデバイス。

アビスの一部なので、初めてみた時はアビスって多才・・・（？）
って感心したもんだ。

「地獄の王をも焼きつくす焰！
その焰にまかれ灰塵となれ！！
ヘルアンドオオオオオオ！！！！」

収束しきつた魔力をランチャーに注ぐ。

「バスタアアアアアアアア！！！！！！」
「フォトンランサー・フランクスシフトオ！！！！ファイアアアアアアアア！！！！」
「アビイイイイイイイ！！！！！！」

拡散したヘルアンドアビスは二人の砲撃に向かっていく。
合計15発の紅黒い魔力砲はうねりながらフランクスシフトを貫

き、デイベインバスターとせめぎ合っている。
つてかフランクスシフトでるのはええよ!!
なんでこの場面で出したの!?

この後フェイト倒れるだろこれ!?

「でも・・・負けるわけにいかんのよなあ!!--!!!--!!」

ドシユウウウウウ!!

「Σにやつ!？」

「くっ・・・!」

デイベインバスターを貫いた。

フランクスシフトは、次々と落とされて行き、ついには最後のフ
アランクスシフトも、

うねり続けるヘルアンドアビスに落とされた。

「二人とも下がって!!」

もういつぺん守るつもりか・・・。
だがっ!

「アビス!回転をかける!!」

「yes master!」

ギュルルルルル!!

回転をかけ、貫通力を高くした砲撃。
勿論・・・。

「その程度なら・・・!」

「貫ける!!」

「く……!」

「まだ……まだ……!!」

相当耐えてんな……流石ユーユーコンビの片割れ！
しかし！

「まだ……ちょっと甘い。」

「ミシイ……ペキキ……!」

「!!!!くそっ!」

ユーノのプロテクションにひびが割れ始める。

「………焼きつくせ!」

「「「キャアアアアアアアアアアアアアアア!……!」」」
（うわあああああ
あああああ!!!!!!）「「「

フェイト SIDE

「ん………。」

なんかあつたかい……。

「んふう……。」「スリスリ

これなんか好き……。♪
でも……。これなんだろう？

「おーい・・・てく・・・よー。」

何か聞こえるなあ・・・。

でもコレ気持ちいくてまた眠くなってきたあ・・・」

「起きねーとキスするぞコラ。」

「！！？」ガバツ！！

「おはようフエイト。」

俺の膝でよくお眠りになっておられましたね。」

「え？」

ってことは・・・。

「お前は今まで俺の膝枕で寝てたんだよ。」

「どうだ！屈辱であろう！！？」

「・・・／／／」

・・・恥ずかしい・・・。

でもなんでだろう・・・不思議と嫌じゃ・・・ないかな？

「・・・何故顔を赤らめる・・・。」

「え？あ、いや、その・・・／／／」

「ま、いいか・・・。

とりあえず、こいつら頼んだ。」

そして彼のもう片方の膝を見ると、なのはとアルフが寝ていて、あぐらをかいていたので、その中にユーノがいた。

「んじゃ、行くかね・・・。

ジュエルシードはもらって行くから。

もつと強くなって・・・また奪いにおいで。

一応回復魔法は使ったけど、まだ感知してるかどうかは分からないからしっかり食ってしっかり寝ること。

OK?」

「は、はい。」

「ん、いい子だ。」ナデナデ

「んっ・・・。」

あ、撫でてもらうのも気持ちいいかも・・・母さんとは違う感じがする・・・／／／

「んじゃ、またな。」

そう言っただけ彼は飛び去った。

魔力を追ってみたけど、途中で完全に魔力反応がロストした。

「・・・・・・フェイク・・・。」

つまり、偽物・・・ってこと?

ってことは偽名・・・だね。

「フェイク・・・フェイク・・・フェイク・・・。」

口に出してみた。

なんでだろう、ただ口に出してるだけなのに・・・体があつたかいような気持ちになった。

おまけ

アリサがデュエルやってるらしいので勝負した。

結果。

「うし。」

バーフェクトデュエル
完全決闘。」

「シルヴァーグローリーとリーサにアルカディアスなんて最低よ・
・！」

最終的にダイヤモンドカッターで総攻撃されるし・・・！」

火と自然のライザーと刃隠でドラゴン連召喚するデッキでした。

でも俺のmana加速からのシルヴァーグローリーには勝てなかったよ
うで・・・。

「もう一回よ！」

今度こそコテンパンにしてやるわー！」

「はいはい、シールド展開・・・。

負け先どうぞ?」
「む・か・つ・く……!!!!!!!!」

気が付いたら今度は高町家に拉致されていた（後書き）

デュエルはノリで入れました。

自分自身、シルヴァーグロリーにはフルボッコにされました。

僕、すつげえ弱いんで・・・。

気が付いたら管理局がいらっやいませ。
(前書き)

頑張った結果。

多少投げやりになったかもしれないです。

気が付いたら管理局がいらっしやいませ。

どうも、先日は柄にもなくガチで暴れた幽亜勇です。
ま、まあ一応本気だったけど全力じゃないし！

で、今ですが・・・フェイトが、テストロッサの城に飛ぶのを待ってるんですが・・・。

「な、なんか違う・・・原作と違うよ・・・。」

ダメだ。

ダメだよあの子。

飛びそうにないよ。

ど、どうなってるんだ・・・。

あ、素手封印は無いみたいですね。

だって、なんか仲良くなってたし。

原作みたいに奪い合うとかないからですかね？

ちなみに、その時ははやてと晩飯食ってました。

『ジュエルシード、発動しました。』

『うーん・・・今回は・・・スルーってわけにもいかない・・・かな？』

イモータル、管理局は？』

『こちらに向かっています。』

艦名は『アースラ』。

どうやらジュエルシードの回収が目的のようです。

搭乗者の中に、クロノ・ハラオウン執務官の存在を確認。
いかがいたしましたよう。』

『・・・今日は俺が自分の意思で行く。』

『ほう、これまた珍しい。

何故でしょう。』

『もう関わっちまったからなあ……。』

めんどくさいけど、関わっちまった以上は、とりあえず出来る限り助ける。

それに、クロノともちよつと顔合わせておきたいかな。

俺みたいなのがいるぜ？ 的なことを管理局に知らせると、

フェイトを逃がすため……。かね？』

『フェイト様……。何をなさったのですか？』

『恐らくはフェイト様が人造魔道士であることの露見を恐れているのだらう。』

人造魔道士の技術は、犯罪らしいからな……。』

『ま、そんなとこだね。』

んじゃ、まあ行きましょうか。

管理局さんにご対面……。』

なのは SIDE

「アークセイバー。」

いくよ、バルディッシュ！」

『Arc saver』

フェイトちゃんがアークセイバーを発動する。

私はとにかくもつと高く……。！

そして、ジュエルシードの暴走体にレイジングハートを向けた。

『Shooting mode』

「行くよ！レイジングハート！」

レイジングハートに魔力を込める。
下を見ると、アークセイバーの鎌みたいなものが、木の暴走体さんの根っこを切り刻んでいくのが見えた。

「貫いて!!」

「デイベイイイイイイイイン・・・!」

『blaster』

この間のフェイクさんのブラッディバルーンを見て思いついた技。
デイベインブラスター。
デイベインバスターの着弾地点を起点に、その周囲に爆発を起こす魔法。

ほんとに、フェイクさんと戦ったびに少しずつ強くなってるような感じがするのは気のせいではないと思う。

レイジングハートが考案した魔力弾で缶を空に撃ち上げ続ける特訓も、

もうすでに百五十回を超えた。

ズドオオオオオオン!!!!!!!!!!

「よし、成功した!」

実はぶつつけ本番なこの魔法。

正直成功するかどうかは不安だった。

でも、レイジングハートの助けもあるし、威力は確実に上がるから大丈夫だと思う。

「貫け! 轟雷!!」

『Thunder Smasher』

フェイトちゃんのサンダースマッシュが放たれる。
しかし、木の暴走体さんのバリアは、まだ破れない。

「っ……！あと少しなのに……！」
「……まだまだ……！」

でも次の瞬間、私たちの砲撃はバリアを砕けないまま終わってしまった。

バリアの再生を後回しにして、木の暴走体さんは私たちを標的にしたみたいで、根っこが私たちに迫る。

「っ！バルディッシュ！」
「レイジングハート……！」
『protection』

ガガガガガガガガガ！！
根っこをガードする。

ガンッ！ガンッ！

その根っこを何度も振り回し、プロテクションに叩きつけてくる。
ピシ……ピシ……！

「くうっ……！」

プロテクションも持たなくなってきた時だった。

「イモータル、“白道”スタンバイ！」
「yes sir。」

” protection blitz ” hakudou ”
standby ok!”

二つ目のジュエルシードを取った時の神社で聞いた声。
・・・ああ、来てくれた。

「月の軌跡に沈め・・・“白道”^{はくどう}!!」

後ろから紅黒い球体が木に向かって突っ込んでいった。
紅黒い魔力光の人は私は一人しか知らない。

「「フェイク(さん)!!」」

「ジュエルシード!! シリアル?!! 封印!!」

ギヤオオオオオオオオ!!

木はジュエルシードを失い、叫び声をあげながら消滅した。
今回は、どうやら黒い近接型の方で来たみたいだ。

「いやぁ・・・危なかったねえ・・・。

俺が機動戦艦ナデ。コ見て、この技思いついてなかったら危なかったかもね?」

「「Σそれってアニメが元なの!?!」」

そっいえばディストー。ヨンアタックみたいだった・・・!

「さて・・・今日もこいつは頂いていくけど・・・抵抗は?」

「勿論させてもらうの!」

「今日こそ覚悟です・・・!」

二人でデバイスを構える。

フェイクさんは少し笑って、拳を構えた。

「じゃあ・・・行くよ!!」

フェイクさんは拳を、私たち二人はデバイスを振りかぶる。
そして、今まさに接触しようかという時。

「!!」バツ!

「!!?」

フェイクさんが急にブレーキをかけて、後ろに飛んでいった。
瞬間、大きな光と共に魔方阵が現れる。

ガキイン!!

「ストップだ!!」

魔方阵から出てきたのは男の子。
黒いバリアジャケットの男の子は、私たちのデバイスを杖で受け止めていた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!

時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ!

・・・詳しい事情を聞かせてもらおうか。」

男の子はクロノくんと言らしい。

そうか、フェイクさんはこの人が来るのを感じたから後退したんだ・
。。。

「。。。。。。」

フェイクさんは若干不機嫌なオーラを放ってる。
戦いを邪魔されたからかな？

「まずは三人とも、武器をひくんだ。

このまま戦闘行為を続けるなら・・・。」

「ふむう・・・なんかヤバそうな感じ・・・逃げるかねえ・・・。
フェイト、なのは！

今回はお開きだ・・・またな。」

そう言っただけで飛び立っていかうとするフェイクさん。

「待て！」

「！？」「ズガン！！

クロノくんがフェイクさんを撃った。
って直撃！？

「ゲホ、ゲホ・・・おいおい・・・時空管理局の執務官様が、一般人に向けて威嚇攻撃も無くぶち当てちゃっていいのかよ・・・。
クソツタレ・・・馬鹿だろお前・・・。」
「あ・・・。」

煙が晴れたそこには無傷のフェイクさんがいた。
クロノくんは、やってしまった。って顔をしてた。

「あゝあ・・・。

お前コレ完全に不祥事だろ。

今の記録したか？イモータル。」

『ばつちりです、マスター。』

画質、音質共に最高の出来です。』

「あいかわらず無駄にスキルがあるが・・・よかる、GJと言って
おこつ。」

さて、管理外世界の民間人に魔法を向け、あまつさえ無抵抗の俺
に直撃させた執務官殿・・・？

どんなご用件かな？」

・・・黒い・・・黒いよフェイクさん・・・。

何だか知らないけど黒いよその笑み・・・。

「・・・くっ！

そ、その件については謝罪する。

だから、一度こちらの誘導に従ってもらえないか・・・。」

「・・・ま、よかる。」

どうせ、魔力調べられるだけだしな。」

「ああ、いつまでもそれでは窮屈だろう。」

ここではバリアジャケットとデバイスは解除しても平気だよ。」

「あ、そっか・・・そうですね。」

それじゃあ……。」

ここは次元航行船の中。

フェイトちゃん、アルフさん、ユーノくん、フェイクさんと五人でクロノくんの誘導に一応従ってます。

一応というのは、フェイクさんが、「気を付けた方がいい。」って言ったから。

とりあえずレイジングハートを待機状態にさせる。

フェイトちゃんもバルディッシュを待機状態に、ユーノくん、アルフさんも人間の姿に戻った。

フェイクさんは……。

「悪いが俺はバリアジャケットを解除する気はない。

また撃たれたらたまらんからな。」

「だからそれについては謝罪してるじゃないか……。」

先ほどからそのネタを引っ張るフェイクさん。

よっぽど撃たれたのむかついたんだね……。

「……で、では、こちらへ……。」

ご愁傷様ですクロノくん。

「艦長、来てもらいました。」

連れて行かれたその部屋には、盆栽、盆栽、盆栽。
火鉢に獅子脅しもあった。

・・・なんかこう・・・色々間違った和風だ・・・。
部屋を中心に正座している緑色の髪をポニーテールにしているおねーさんがいた。

「おつかれさま。

それに、皆さん。どうぞどうぞ、楽にして？」

勇 SIDE

なのはの事情はユーノのお手伝いだとして・・・ひそかに気になっていたのは、フェイトのジュエルシードを集める理由だ。
フェイトは、家族とは上手くいっているというし、特に集める理由がない。
一体なぜ・・・ジュエルシードを集めているのか。
普通に気になった。

「私は・・・ごめんなさい。

黙秘させて下さい・・・。」

うわ、結構後ろめたいことらしいね・・・。

「すまないが、そういうわけにもいかないんだ。
教えてくれな」《あらあら、クロノ？無駄に詮索するのはよしな

さい。》「か、かあさん!？」

「え!？え!？」

わ、私何もいってないわよ?」

そりゃあそうだろ。

だって、俺が言ったんだから。

「《まったく・・・女の子の秘密を無理矢理知ろうとするなんて・・・僕は変態だなあ・・・。》」

「お、お前か!？」

な、なんだそれは!？」

「なんだそれは・・・って言われても・・・。

《ただの声真似なの。》」

「Σにやつ!？」

今度は私!？」

弄りがいありすぎるだろこの世界の人・・・。

たかが声真似で・・・。

とりあえずクロノの首に腕を回し、ひそひそ声で忠告しておこう。

「あのな、クロノ。

女の子の秘密を無理に吐かせるってのはさあ・・・マジで止めておけ。」

「な、なんでそんなことキミに言われなくちゃならないんだ・・・。

「俺は一回だけそれを行ったことがあるが・・・。

その後、十数人の女子に囲まれ、軽く私刑を受けたことがある・・・。

己の身が惜しくば・・・やめておけ。」

「・・・わ、わかった・・・。」

実際、あれはやばかったです。by 作者

「で、あなたのことなんだけど・・・。」

「俺？」

「そう、なんでフェイトさんとなのはさんとジュエルシードを奪い合っているのか。」

その理由を知りたいんだけど・・・。」

ま、普通はそうくるわな・・・。

「うん、別に困ることじゃないし、話してもいいか。」

俺の行く先々で発動して、俺が巻き込まれるからさあ・・・もういい加減うつとおしくてな？」

もう自分で集めてどっかにポイしちゃおうかなあ・・・と。」

「・・・それだけ・・・ですか？」

「ん、それだけ。」

あ、あとは体がなまらないように運動・・・的な？」

あ、みんなぽかーんってしてる。

まあ、それだけでロストログア集めようなんて呆れるしかないわな？」

「で、用は終わったよな？」

帰っていいか？」

「いや、まだちょっとだけ。」

「ジュエルシードの回収についてですが、時空管理局が全権を持ちます。」

「……！」

で、そう来る……原作通り……。

だがここから……すこしばかり“種”を植える。

「まあ、いきなり言われても気持ちの整理が付かないでしょうから、一晩ゆつくり考えて、それから改めてお話ししましょう？」

「へえ……一晩ゆつくり考えるねえ……。」

「……何が言いたい？」

「いや、別に？」

管理局が全権持つって言うてんのに、

一晩ゆつくり考えたところで、管理局に良いように使われんのがオチだなーって思ってたさ。」

「……！」

「か、母さん！？」

「！？」

やどりぎのタネセット完了。

あとは、こいつが広がってくれるのを待つ。

これで、少しは危機管理能力とかつくかね？

「じゃ、そういうことで……あ、俺はこれからもジュエルシードの場所に出てきて、

ジュエルシード奪っていくからそのつもりいてくれ。

イモータル、転移頼んだ。」

『All right master.』

さて、はたしてどう相成りますやら・・・。

「勇、ごはん。

主に肉！」

「わ、私はなんでもいいよ？」

「しょうがねえなあ・・・。

鶏の唐揚げにするぞ？

いいな？」

「やつほう！

だから大好きだよ勇！」ギユ

「はいはい、

火、使ってるからあっち行つてな？

フェイトもそれでいいか？」

「う、うん。」

今日の晩御飯。
鶏のから揚げ。

気が付いたら管理局がいらっやいます。(後書き)

技名

白道：意味

月の軌道のこと

プロテクションを纏い、突撃する。

ぶっちゃけるとディストーションアタック。

眠いよ！

眠いよ！

これで後書き書くの三回目だよ！

寝ぼけてけしちやったりしてたよ！

10/12

誤字修正しました。

指摘していただいたDai様、ありがとうございました。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。(前書き)

気が付いたらお気に入りが二百件突破。

六万アクセス&一万ユニークも突破。

え?・・・ん?

って感じで二度見しました。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。

「……………！」

何かがきた。

この感覚を俺は知ってる。

「最後の能力……………」

実は、俺は三つの能力を全て把握していた訳じゃない。

それぞれの能力が必要不可欠な状況下の場合に発現する。

現に、キーマスター魔力を隠さなければならぬ事態に陥った時（
実は管理局に追い回された。）に。

重力操作は逃げる過程で高いところから落ちた時に発現した。

……………今考えてみれば飛行魔法使えばよかったかなと思う。

「勇くん、どしたん？」

あ、もしかしておいしくなかった？」

「ん？ああ、違うよ。」

ちつと考え事だ。

料理は美味いぞ？」

よしよし、おじちゃんがほめてやろう。「ナデナデ

「ふにゃー……………」

あ、今はやてとご飯食べてます。

言っただよね？

たまに食べてるって？

……………言っただよ？

「まるで猫……いや狸？」

「ふにゃー……Σって誰が狸やねん！！」

「はいはい、んなカッカしないの。」

ホレ、わしゃわしゃ……。」

「くうくん……」

犬と狸の狭間だな。

「さて……この能力……なんで今出てきたんだ？」

出てきた能力は“再生”。

どうやら死んだ細胞や、肉体の一部を再生させる能力らしい。

その力は、自分の魔力を直接注ぎ込み再生させるので、自分は再生できないらしい。

「……使い道が限定的だな……。」

『いや、でもなんか他人限定ですけど結構便利じゃないですか。』

「まあ、そうだけど……。」

何に使えばいいんだ。

はやての足か？

はやての足の再生か？

あれは呪いだろ？

細胞は元々ちゃんとしてるだろ？

「まあ、しかたあるまい。

手に入れた能力は能力。

大切に使うとするかね。」

「マスター、ただいま帰りました。」

「お帰りなさい、イモータル。」

「どうだった？」

「バッチリです。」

テストロッサの城、見つけて参りました。」

イモータルにはテストロッサ家の城の場所を調べて貰っていた。
調べるときはイモータルの眼は閉じて、

イモータルにセツトアップできなくなるんだけど、
ま、その分の情報は手に入るし構わん。

「さて……んじゃ、行くか。

イモータル、転移頼む。」

「はい、マスター。」

とうとうフェイト様の御実家にご挨拶ですか。

なかなかどうしておやりになりm「そんなに割られたいか？」

OK、その手に持ったハンマーを下ろして下さい。

そつとです。」

イモータルなんでもなった？

はやて side

今日は勇くと晩御飯を食べる日。

勇君とは、最近スーパ―で会った。

私と同じ位の男の子。

両耳にはピアスをしてるけど、

不良って感じじゃない。

っていうか主夫やなあれは。

私と同じで、小さい時に親を亡くしている。

「おい、はやて。

出来たぞ。」

「Σはやっ!?

まだ焼けてへんねんでこっちは!」

相変わらず料理作んの早いなあ……。

第一あの包丁捌きはなんやの?

人間技ちゃうで?

私と勇君。

週に二回くらいのペースで晩御飯と一緒に食べてる。

私の足が動かないから、お皿を運んだり色々して手伝ってくれる。

「ん?

あ、やけてない?

あいよ、んじゃ何かしらもう一品追加するわ。」

そういつて取り出したのはマグロの切身。

刺身にでもするつもりなんやらなあ。

シヤラララララララ！！！！！

「Σだからなんやねんその包丁のスピード！？
奥義？奥義なんか！？」

食事中。

その日あったことを話したりする時間。

「でな、結局全勝。

そいつブチ切れてな？

俺に関節技喰らわしてきたんだ。」

「うわ・・・凄い人やなあそれ・・・大丈夫だったん？」

「女の子に負ける程墮ちてはいませんか？」

大抵話すのは勇君。

今日はデュエルである女の子に全勝した話しやった。

え？私もデュエルするの？

するよ？入退院繰り返し返して、一人でつまらなかったから病院の先生にも教えつけてやってたわ。

「それにしても、勇君意外とリア充しとんなあ。」

「ぶっ！

おめーいつのまにんな言葉覚えやがった・・・。」

「だってそやる？

毎回毎回ほとんどの話が女の子絡みやん。

妬けるわぁ・・・。」

「妬けるっってお前・・・。」

「あ、そや、前々から気になってたんやけど・・・。」

とりあえず、聞くだけ聞いてみよ。

「なに？」

「勇君はそんな中に好きな人とか居るん？」

「・・・もはや定番ともいうべき質問だなはやてよ。」

「ま、聞けるもんは聞いた方がええやろ？」

そういう話題、結構興味あんなん。」

「夜通し恋愛小説読みふけてるからだろバーロ。」

「Σってえ！何で知ってんねん！！

ストーリーか！！」

「一回お前の部屋でデュエルした時に本棚のほとんどが恋愛モノだった。」

うかつやった・・・まさかそこまで洞察力が高いとは・・・。

「さすがは勇君・・・私が認めただけの事はある・・・。

ま、デュエルはまだまだ私の方が上やけど。」

「へっ、言ってる。

すぐに王者の座、ぶんどってやるよ。」

楽しみにしてんでえ？」

ま、当然負ける気はないけど。

「お、もうこんな時間か・・・。
そろそろ帰るとしよう。」

「あ、ほんまや。」

時計を見るともうすでに夜の七時を過ぎていた。

「んじゃ、俺帰るわ。

飯、うまかった。

ごっそさん。」

「何言うてんねや、半分以上自分で作ったクセして。」

「だからその半分以上のはやての料理を評価してんだろっが。」

そんなセリフ普通に言えるなんて反則やろ？

なんやねんもう・・・／＼／

「え、ええからはよいき！／＼／」

「なんだよもう・・・せつかくほめたのに・・・。

ま、いいや。

おやすみ、はやて。」

「うん、おやすみ。

勇君。

またきてやー。」

そう言い残すと、勇君は自分の家の方向に走っていった。
私は、勇君の姿が見えなくなるまで玄関にいた。

「・・・・・・・・勇君。」

あつたかい。

いままではひとりだったけど。
今は違う。

友達ができた。

冗談を言い合って、お話して、一緒に料理もして、一緒に遊べる友達。

「えへへ・・・勇君・・・。」

上を見た。

お月さまがまんまるで、とっても綺麗やった。

私は、こんな日常がいつまでも続きますようにと願って家に入った。
いつもみたいに一人の家だけど、不思議と寂しくは無かった。

気が付いたら未確認だった三つ目の能力が判明した。（後書き）

主人公の三つの特殊能力が全て明るみに出たところで、ここに乘せておこう。

能力No.1

名称 キーマスター

効果 魔力で“鍵”を作り出し、
鍵をかけたい場所、モノを指定。

それに差し込み、捻ること場所なら空間を固定。

モノならその機能を封印する。

主人公のリンカーコアはSSS+オーバーとなっているが、
実際、SSS+オーバーとしかランクがないので、
そうなっているだけである。

本当ならSランクのロストロギアくらいなら“鍵”一つで封印できる。

能力No.2

名称 重力操作

効果 文字通り重力を操作する能力。

ただし、範囲は半径二メートルより広げられない。

ちなみに、実は引力を操作するのも可能だったりする。

が、某千年に一度の魔界の王を決める戦いにでてきた重力を操る魔物みたいな感じに、

いや、能力の使用に身体が若干耐えきれていないので、使うたびに
身体のどこかが少し断裂する。

怪我の程度としては軽い切り傷くらいだが。

能力No.3

名称 再生

効果 人間や生物の死滅した細胞を再生することが出来る。

が、自分の魔力を他人に与えることで効果を発揮するので自分は再生できない。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。(前書き)

シリアス苦手すぎて描写が無理やりっぽい感じになってるような気がする・・・ああ、やっぱり俺は社会のゴミであつたか。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。

プレシア side

「……プレシア。」

「ええ。」

城に侵入者。

微弱だが、感じ取れる。

どうやら転移してきたみたいだが……フェイトではない。

「行ってくるわ……。」

アリシアを御願い。」

「ええ、気を付けてプレシア。」

side out

「さて……着いたはいいものの……どうするべ?」

テストロッサ家に転移出来たはいいものの、
どこがプレシアがいるところかわからない。

「これじゃ八方塞がりだな……。」

「ん……?」

「どうした?アビス。」

「いえ、魔力ランクSS反応。」

こちらに近付いてきます。」

「……お出迎え……ってわけじゃなさそうだな。」

「ええ、どちらかと言うと魔力をぶち当てて恐怖を与えて逃がそう

としているみたいです。』

怖い怖い。

最初から臨戦態勢かよ。

「ったく……でも、アレだよな。

“ 和平の使者は武器を持たない ” らしいし……ゆっくり待とうか? 」

『 yes master 』

そう言つて俺はとりあえずHMDを装着した。

プレシア side

「あなたが侵入者ね? 」

「侵入者とはひでーよなあ……ま、そつちからしたらそうなんだろうけども。」

私が放つた魔力に怯えもせず、ただへらへらと笑っている。

力の差がわからないうつけなのか、それとも私程度なら倒せると思つているのか。

どちらにせよ……

「何をしにきたのかしら?

返答次第では、貴方を殺さねばならない。」

「怖っ! おいおい、そう殺気立たないでくれよ……ちょっと話にきただけだろ? 」

『 ええ、あ、プレシア様、先日テーブルに置いてあつた残り物と思われるケーキ。』

「ごちそうさまでした。」

「Σ喰ったんか!？」

何人様の家の食い物漁ってんだバカデバイス!」

……で、デバイスって物を食べるのかしら……。

「いや、すいませんねえ、うちのバカデバイスが。」

「え? え、ええ、別に大したことではないから構わないけれど……。

」

『すみません、相方がとんだご無礼を…… あ、こちらつまらない物ですが。』

彼のデバイスらしき紅いピアスが光ると、私の手に一つの箱が現れた。

「あ、それうちの近所で評判の喫茶店のシュークリームなんだよ。めっさうまいから大事に食べるように。」

……そんなに美味しいのならアリシアに食べさせたいわね。これは取っておきましょう。

「で、本題に入りたいんだが…… あんた、フェイトの居場所を知ってるか?」

「! ? 何故貴方がフェイトのことを! ?」

「そりゃあ友達だし?」

お隣だから。」

「お隣……?」

「そう、お隣。」

「ご近所さん。OK?」

「え、ええ。」「ってかその様子だと知らないみたいだな?」

フェイトは今、地球でジュエルシードを探してあっちこっち駆けずり回ってる。

あんたに聞きたいのはそれについてだ。

何故だ？何故あいつはジュエルシードを集めてる？

あんなに必死になって、何故？」

……………ジュエルシード……………？

まさかあの子……………。

「……………その話は本当なのね？」

「ああ。」

「……………少しか聞いてもいいかしら？」

「構わんが……………なんだ？」

「あの子、向こうで友達は出来た？」

「……………ああ、女の子の友達が一人出来てたよ。

もちろん俺もだが。」

「そう……………よかった……………。

来なさい。

推測だけど、あの子の目的を教えてあげる。」

勇Side

「うわ……………」

『これはこれは……………』

『大きいだろう？これがこの城自慢の図書館だ。ま、管理局の無限書庫には叶わ「なんでお前が自慢してんだよ。」いや、なんというがノリですマスター！』

だが、確かに大きい。

国立の図書館並にでかい。

城の大きさからしてここまでいけるのかとも思ったが、空間に何かしらの細工がしてあるようで、あまり気にしないことにした。

「ここには、古い古い言い伝えの本から魔法理論の本。

中には料理のレシピなんてものもあつたりするわね。

そんな様々な本が並べられているわ。」

「無限書庫もびっくりなスケールだなオイ……………」

ほんと、呆れたもんだ。

「その中で……………これね。」

プレシアが、魔法陣を展開する。

恐らく検索魔法みたいなもんだろう。

一冊の本がプレシアの手元に届いた。

「……………“宝石の種”……………？」

表紙には、そう書かれていた。

「これは……………まさか、ジュエルシード……………」
「お母様、ここにいるの

」？「……？」

後ろを振り向いた。

そこには、車椅子に乗った金髪の子と、その車椅子を押す猫耳の女性^{メロ}がいた。

「プレシア……その方は……？」

「ああ……この子は……そういえば名前聞いてなかったわね？」

「あ、今気付いたんだ……俺は贋作^{フェイク}。」

本名は幽亜勇。

一応、フェイトの友達だ。」

「私はプレシア・テストロッサ。」

あの子は私の娘でアリシア。

車椅子を押してるのが私の使い魔でリニス。」

ご丁寧にも……。

「で、彼が侵入者だったわけですか。」

「ええ、フェイトの居場所を知らせにきてくれたらしいの。」

「え？フェイト？フェイトが帰ってきたの？」

アリシアが叫ぶ。

よく見ると、眼が何かに覆われていた。

……！？

「プレシア！」

「な、何！？」

「今からアリシアに俺が何かする。
が、2つ程約束を頼む。」

一つ、俺には何もしないこと。

例え何があるうと……だ。

二つ、俺とアリシアをリニスと一緒に結界に閉じ込める。

全力だ。魔力が毛の先程もでないように！」

「貴方一体何を……」「いいから早く！」わ、わかったわ！リニス！」

「し、信用するんですか！？」

「いいから！やるわよ！」

リニス、プレシアの結界が俺とアリシアを包んだ。

「……何があっても結界を解くな。

いいな。」

「……何をするつもりなの？」

プレシアが心配そうに結界越しにこちらを見る。

「任せろ。」

これがうまくいきや皆幸せやっほうだ。」

「……？」

何がなんだかわかってないアリシア。

「……さて、アリシア。

俺は贗作。^{フェイク}

フェイトの友達だ。」

「ふえ？そうなの？」

「ああ、ところで、アリシア。

お前、義手だな？」

「……！」

「それに眼が見えてないし、義足か……。」

ヒュードラ事件の後遺症ってどこだな？」

「なんでそんなこと……。」

ま、色々見たし、それに、俺には新しい能力がある。

「成長も何故か止まってる……。」

これも後遺症……か？」

「し、知らない！」

知らないよ！」

おっと、怖がらせたみたいだ。

一々本題から外れるのは悪い癖だな。

「さて、ここで君に質問だ。

もう一度、走り回りたくないか？

母親の顔を見たくないか？」

「え……？」

アリシア s i d e

「え……？」

何を言われたのかさっぱりだった。

この眼は、いくらお医者さんに見せても治らなかったのに。
足なんて義足で、歩くのがやっとなのに。

「何……言ってるの……？」

「俺にはその身体を治す術がある。

だが、そのためにはお前さんの力も必要だ。

いや、お前さんの心が大事……って感じか。

もう一度言う。

もう一度、走り回りたくないか？

母親の顔を見たくないか？

……自分の妹の顔を見たくないか？」

見たい。

走りたい。

最近できた私にそっくりだと言う妹と遊びたい。

でも……有り得ない。

「そんなの……無理だよ……」。

どこのお医者さんも駄目だって言っただよ？」

「俺は出来ないことは出来ると言わない。」

「……ほんと？」

ほんとに……また見えるようになる？」

「もちろん。」

フェイトの顔も見れるぞ。」

「ほんとにほんと？」

「おう、ほんとにほんとだ。」

インディアンウソツカナイ！」

おかしな人だ……」。

でも、ほんとにできちゃうかもしれない。

そう思った。

「じゃあ……どうすればいいの？」

だから、任せてみよう。

また、お母様に会えるなら。

お母様の優しい顔が見られるなら。

私のわがままで産まれたと言う妹を見ることが出来るなら。

この人を信じてみようと思った。

「どうすればいい……簡単だが、大変なことだ。

俺が治療をする間、痛みに耐えてくれればそれでいい。

時間は……アビス、イモータル、どの位だ？」

『恐らく5分から15分かと思われます。』

『“鍵”の管理はお任せ下さい。』

こんな時が来ると思ってマスターのキーシステムを把握したのですから。』

「へっ……本当にそれだけか？イモータル。」

『勿論、マスターをTo Loveるの渦中に放り込むことにも役立ちm「カチ割る。」ok、もちつけ。』

デバイスらしき機械音声と漫才もする人。
凄く面白い人だった。

「さて……覚悟はいいか？

相当痛いと思うから……頑張れよ。」

「……うん。

大丈夫。」

「それじゃ……いくぞ？

再生箇所、特定開始。」

『search』

『key release ready?』

「キー、……？……？……？全て開放しろ。

再生箇所、両腕の肘から先、及び眼に連結している全ての神経。

そして両足の膝から先、リンカーコア。

再生は骨から神経、筋肉、コアの最大魔力値まで今のアリシア・

テストロッサの物になったであろう物を再生。」

『yes master』

“reverse” All systems are go

3 2 1 key all open

「くっ……なんて馬鹿魔力なの……？」

外でお母様が頑張ってる。

待ってねお母様。私頑張るから。

頑張つて全部治すから。

そしたら・・・一緒にまた遊びに行こうね？

「いくぞ！！アリスア！！」

再生開始!!!」

そうやって、彼の手が私の肩に触れる。

その瞬間、

「ぐが……アアアアアアアアアアつ！！！！」

痛い。

痛い痛い痛い痛い。

イタイ。

「頑張れ……！」

終わったら……おじさんが美味しいケーキごちそうしやるかん

「な！」

「あがつ……うん……！が、がんばる……！！」

ギ……アアアアアアアアアア！！！！！！」

腕の付け根、足の付け根、眼、胸、これらすべてに激痛が走る。
がんばるんだ……お母様にもう一度お花の冠作ってあげるんだ。

フェイトと一緒にリニスにお料理を習いながら一緒につくったり、
フェイトと魔法の練習をしたり、
いっぱいいっぱいやりたいことがあるんだから……。

「まげない……ぜっだいになおずの……！！！」

「ああ……まげんな……！！」

「気休めだ……けど……俺が付いてるから……！」

そんな痛みが永遠みたいに続いた。

リニス side

「アリシア……！アリシアアアアアアアア！」

「ぷ、プレシア！！」

「結界に集中してください！！」

「私たちが結界を維持しなければこの城は次元震で倒壊します！！」

今、アリシアに治療らしきものを施している彼。

彼の魔力量が問題すぎた。

結界をはれとはそういうことだったのだ。

彼の魔力量は巨大を通り越して極大。

恐らく、プレシアの数千倍の魔力。

ロストログアなんか目じゃないほどの魔力がこの結界の中で渦巻いている。

「プレシア！！」

「しっかりしてください！！」

「離してリニス！！」

「アリシアが痛がつてるの！！」

「このままではアリシアと一緒にあなたまで死ぬことになるんですよ!!」

みんなで仲良く虚数空間にピクニック!? そんなのごめんです!!
いいからさっさと手伝いなさい!!」

「アリシア……!」

待つててね……すぐに終わらせて迎えに行くから……!!」

そう言うて結界の維持に加わるプレシア。
結界の中のアリシアを見る。

「……!？」

なんですかアレは……?」

彼の放つ紅黒い力がアリシアに叩きつけられる。

いや、アリシアの中に入り込んでと言った方が正しいか。
アリシアは激痛が走っているのだろう。
泣き叫んでいる。

「……の……なお……!!」

時々、何かを叫びながら泣き叫ぶ。

正直、見ていられなかった。

結界の中の話は聞いていた。

彼はアリシアの体を治す術があると言っていた。

それには痛みが伴うとも。

でも、これほどまでとは聞いてなかった。

「……頑張つて……アリシア……!!」

勇side

「はぁ……はぁ……」。

終わったぞ……アリシア……」。

「お……わった……？」

なあった……？アリシアの……からだなあったの……？」

アリシアが少し幼い口調で言う。

「ああ、終わった……」。

でも、今はとりあえず……寝とけ……？
な？」

頭を軽く撫でてやる。

んっ……と少しだけ声をあげると、うつすら目を開けた。

「……あは……」

フェイク……全然おじさんじゃないじゃん……」。

そう言つて、気を失う。

とりあえず、首筋に手を当てる。

……よかった……生きてる。

『両腕、両足、眼、リンカーコア。

どれも正常です。

動くには多少のリハビリは必要ですが、問題はないでしょう。』

『おめでとうございますマスター！』

ですが、今はゆっくりおやすみなさいませ。』

「ああ……そうさせて……もらっかな……？
イモータル、“鍵”、頼ん……だ……。」

ばたりと倒れる。

うつすらと『心得ております、マスター。』と、馬鹿デバイスの
声が聞こえた。

気が付いたらちょっとシリアスになっていた。(後書き)

いつのまにか七万アクセス越えててびっくりしてデュエマのナイト
デッキをなくしました。

10/26

誤字修正いたしました。

居倉 高夫様、ありがとうございます。

気が付いたら知らない天井だ……。 (前書き)

F様、ウルキアガ様、Mr.kk様。

感想ありがとうございます。

そして十万PV。

いや、まさかそんな……。

嘘だろ？

ありがとうございます。

これからも誠心誠意心を込めて書かせていただきます。

気が付いたら知らない天井だ……。

勇side

「知らない天井だ……。」

言ってみたかった。
後悔はしていない。

『おはようございますマスター。』

『やはりそのセリフはテンプレですね。』

「……否定はしないな。」

俺どうなったんだっけ？

えーっと……確かアリシアの身体を再生したところまでは覚えてるんだけど……。

「あ、起きたみたいですね。」

ドアからでてきた猫耳のおねーさん。
リニスだ。

「おう、おはようさん。」

アリシアはどこだ？ちゃんと再生したか確認しなきゃならん。」

一応治した手前、しっかり看ないと。

「はい、こちらです。」

歩けますか？」

「ん。問題ない。行こう、案内頼む。」

「あの……フェイクさんでしたっけ？」

「あ？ああ、本名で呼んでもいいぞ？幽亜勇。」

「では、幽亜さん。」

貴方は何故あんな事をしたんですか？」

「あんな事？」

「アリシアの事です。」

再生か……。

……なんでだろう？

「なんでかな？」

「なんでかなって……。」

「いや、多分わかるんだよ。」

俺には合計で3つのレアスキルがあるんだ。」

「3つ？」

リニスが足を止め、振り向く。

うん、ナイス猫耳。

「その能力は皆が皆俺が必要な時に出てきた。」

で、この“再生”は、今日、この城に来る直前に発現した能力なんだ。」

「Σ今日!？」

使ってみたり試したりもしなかったんですか!？」

驚いてるな。

ま、普通は練習とか鍛練をしてからだしな。

「うん、急なことだったからな。

今までの能力は俺が必要な時に出てきた。

つまり、この“再生”は、今、この瞬間、アリシアを治すために生まれた能力だと思った。

そう思ったら、身体が勝手に動いてたよ。

気付いたらアリシアの肩に手を置いてた。」

「あなたは……初対面でよくあんなことができましたね……。」

リニスは呆れ顔でこちらを見る。

ま、結局は良かったんじゃない？

アリシアは直せまし。

「はい、OK。

アリシア、もう細胞もリンカーコアも傷一つ無し。

動くには、多少リハビリが必要だから無理するなよ?。」

「うん、ありがとうフェイク。」

アリシアの診察中。

再生したからと言って、すぐ動けるようになるわけじゃない。

ただ、眼だけはすぐに慣れたらしく、俺の顔をぺたぺたしてはにっこり笑ったり、

プレシアの顔をぺたぺたしたり（その最中プレシアはずっと嬉し泣きしていた。）本を読んだりしていた。

曰わく、自分で本を読んでみたかったらしい。

お前、文字わかるのか？と聞いたところ、

私はプレシア・テストロッサの娘だよ？

と、返された。

幼い頃から英才教育でも受けていたのだろうと確信し、そして納得した。

「で、フェイトの件なんだが……。」

診察が終わり、プレシアの部屋で本題に入る。

アリシアの治療で一杯一杯だった俺は、

フェイトの目的について聞きそびれていた。

「で、“宝石の種”だったか？

その絵本がどうかしたのか？」

あの時プレシアが差し出してきた絵本。

タイトルは“宝石の種”。

タイトルからしてジュエルシードに関しての本だろうとは思っただが……。

「ええ、まずはこの本の第七章を見て頂戴。」

そう言うプレシアに従い、その第七章を開いた。開いたページには挿し絵があった。

ある青年が、少年の身体にジュエルシードらしき光り輝く宝石を押し当てている。

「昔々、あるところに二人の兄弟がいました。」

プレシアが語り出す。

「彼等は非常に仲のよい兄弟でしたが、弟は不治の病を患っていました。」

プレシアのほうを向く。

プレシアは少し微笑みながら語っていた。

「兄は弟を助けようと必死で働き、国中の名医に弟を診せましたが、医者は総じて首を傾げるばかりでした。」

再び挿し絵に目を向ける。

そういえば、兄と思わしき青年の後ろに白衣の男がいるのがわかる。

「ある日、兄が湖にきました。」

湖の畔には美しい花が咲いていたので、弟に持ち帰ろうとしたのです。」

「兄が花を摘もうと屈むと、そこにあった美しく輝く種のような物を見つけました。」

兄は見舞いにちょうどいいと思い、弟にそれを持ち帰ろうと、手を延ばしました。

上機嫌で帰宅した兄は担当の医者に軽く礼をしたあと、弟に花と、種を渡しました。

すると、種が眩い光を放ち始めました。

そして、兄は意識を失いました。

数時間後、兄は身体を揺すられる感触に眼を覚めました。

眼を覚ました兄を起こしたのは弟でした。

弟は寝たきりでベッドから出れなかったはずなのに、弟はベッドから這い出て、その足で立ち上がると、兄の元へ駆け寄ったのです。

兄と弟は泣きながら抱き合いました。

医者がその後診断すると、不治の病だった筈の病はすっかり治り、弟はかつてと同じ、いや、それ以上に元気になっていたのです。

きっとあの種のおかげだと思った兄弟は、その宝石のような種を“ジュエルシード”と名付け、祠に大切に奉りました。

「その絵本……フェイトとアリシアがよく読んでくれてせがんできたのよ。」

語り終えたプレシアが口を開く。

「ってことは、フェイトはこの絵本を信じてジュエルシードを集めてたのか？」

「その可能性は十分あるわ。」

じゅ……

「純粹すぎる……！」

「私の子は可愛いでしょう？」

……ちょっと子供すぎるけど。」

ジュエルシードでアリシアを治すため。

しかし、身体を再生するなんてことだから数が必要。

どうせなら全部集めちゃえ。

そう言う思考がフェイトの頭の中で渦巻いたのだろう。

「まあ、予想に過ぎないのだけど……当たってると思っわよ？」
「っばいな……。」

「で、お前等どうする？」

フェイトの目的もわかったところで、再びアリシアの寝室。

「何がよ？」

「いや、フェイトだよ。」

連れ戻すのか？」

「うーん……そうね……引っ越しでもしようかしら？」

フェイトが住んでるところに。」

「……はい？」

波瀾万丈。

波乱万丈。

明日もまだまだ騒がしい1日になりそうです。

おまけ

「帰ってきたぜ我が……家？」

なんか御屋敷みたいなんだけど……。

で、なんでアリサとすずかがいるの？

なんでトランプしてるの？

しかもポーカ―ってどうなの？

あ、アリサスリーカードだ、なかなかどうしていい手だな。

「あ、あんた……どこから入ってきたの勇！？」

あれ？

「俺HMDつけてない！？」

そういえばアリシアも「フェイク全然おじさんじゃない」とかなんとか言ってたような……。

「い、いつからHMD外れてやがった！？」

『魔力を限界まで再生に回したからでしょう。』

「昨日から外れてましたよ？」

『うむ、転移先を失敗したようだ。』

申し訳ありませんマスター。』

「Σもつと早く言え！！」

結局、誘拐事件の時のことやらなんやらバレました。

気が付いたら知らない天井だ……。 （後書き）

ご都合主義が発動致しました。

駆け足でした。

イモータル？はい、意図的ですよあいつ。

アリサ達にバレました。

そして、次回、テストロツサ家引っ越します。

フェイト、強く生きる……。

同時投稿でゼロの使い魔の予告（？）の方も宜しくお願いします。

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

はい、激闘魔法バトルアクション小説 Lie Ahead Wa

111 立ちはだかる壁

の、陰里 愛様とのコラボ・・・とも言えなくもないかもしれない
感じのあれです。

外部ですが・・・？

いいんですか？

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

「あ、どうもこんにちは。」

「ん、お主が幽亜勇殿か？」

「あ、うっす。」

で、えーっと・・・あなたの名前は・・・ミンウ？でしたっけ？」

「FF2には出て来んぞ？」

僕は『神雷の導き手』ミンウツェンド・J・E・ジュリインツメルト。

雷帝と呼ばれておる。」

「あ、二つ名付いちゃってる感じですか？」

えっと・・・じゃあとりあえず自己紹介を・・・。

僕は・・・えーっと・・・。」

「いや、強引に二つ名考えなくても・・・。」

「あ、思いついた。」

僕は、『深淵の不死者』幽亜勇です。

フェイクって呼ばれてました。」

『マスター、それ、私達の名前足しただけじゃないですか？』

「さっそくばれやがったコンチクショウ。」

『はじめまして。』

ミンウツエンド・J・E・ジュリンズメルト様。

めんどくさいですね。じゃあ雷帝様でよろしいでしょうか?」

「あ、ああ・・・構わぬが・・・。」

『では雷帝様。』

私、紅い方のピアスがマスターのデバイスのアビスで御座います。

』

『黒いほうの私がイモータルと申します。』

『以後お見知りおきを。』』

「あ、ああ、よろしく頼む。」

「で・・・今日はなんか漫才をするということとで・・・。」

「うむ、なんか・・・急に言われてな?」

「お互い大変つすね。」

「まったくじゃ・・・。」

「で、ネタなんすけど。」

どうでしょうか?

なんかもうあれでしょ?

いちいち考えんのめんどいから芸人さんのパクリ安定かと思うんですか?」

「パクリというな。」

リスペクトと言えリスペクトと。
ふむ・・・まあpak・・・リスペクトするにも誰をリスペクトする
かであろう？」

「今、パクリって言いそうになったよね。

絶対言いそうになったよね。

ま、そこが問題っすよね。」

どうしますかね？ちよつと懐かしいけどオリエン・ルラジオさん
とかどうですか？」

「互いの武勇伝でも語りながらの漫才でもするつもりか？

それに、キャラではないのだが・・・。」

「いや、そこがいいんじゃないっすかね？

あれですよ。

どうせお互いの本編には関係無いですし。別にかまわねえ！！

ってか恐れながらたまにははっちゃけた方がいいと存じ上げます
が？」

「・・・・・・・・・・。」

「いや、そういうことではない！
ああ、もういい！お前がこっちの役目をやれ！！」

「
でんでんでんでんでんでんでん。
でんでんでんでんでんでんでん。
でんでんでんでんでんでんでん。」

「深淵雷帝じゃ。」

「おねげえしやす！」

「幽亜よ、いつものをやってやれ。」

「おお、聞きてえか俺の武勇伝。」

「その凄い武勇伝を言つてやるがよい。」

「俺の伝説ベストテン！」

「Let's go!!」

「魔王と死神二人落とした！」

「そっちの方でも五人才トした！」

「武勇伝！武勇d「ちょっと・・・すみませんマイクとめて！」な

んじゃ一体……。」

「いや、オトした覚えはないんですけど？」

「いやいや、意味分からんし。」

「全く持つて意味分からんし。」

「お主……。」

「いやいやいや？そんなフラグ立てた覚えはないですって。」

「たしかにアレだけど、餌付けしたけど。」

「フラグとか皆無だし。」

「いやいやいや？」

「一人で寂しかったであろう少女の前に現れた男の子が？」

「しかも一緒に遊んでくれて？」

「完璧な旗立てお疲れさまとしか言いようがないじゃろっか？」

「誰の事言ってるんですか？」

「ちょっつと記憶にな……あれ？」

「もしかして……？」

「記憶にあったようじゃが……一応言い分を聞いておこうか？」

「フラグハナイヨ。」

「一言で言っても説得力が皆無じゃな。」

気が付いたら外部とのコラボが決定していたので、漫才ってかショートコント

えっと・・・。

なんかほんとすみませんでした。

あの、ほんとごめんなさい。

なんか・・・いいの思いつかなくて・・・。

短い・・・なんかあれだし・・・。

オリエンタ・ラジオさんにも申し訳ないかと・・・。

はい、以後反省します。

はい、ゴメンナサイ。

あ、雷帝さんは女の子です。

ごめんなさい。

のじゃロリです。萌えます。

ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5813w/>

気が付いたら転生してチートなリリカルだった。

2011年11月4日08時24分発行